につけても、都の戀しさに堪えかね、

はま千鳥あとは都にかよへども
身は松山にねをのみぞなく

など三十一文字の和歌にて心の裡を云ひ顯はされたこともある、

遂に御所の建築は竣工し、之へ遷し奉つたが、其の御所は高島と云へる所に設けられた。新たに新院のために態々設け奉つたと云はゞ如何にも敬し參らせたるやうには聞ゆれども、殆んど牢獄に等しく、否全く牢獄のさまにて、四方を築土となし塞ぎ、只一つの喰物の出し入れなどをする所の口を設けたるのみにて、日に三度の食事を捧げるものゝ外は、誰れとて訪れ奉るものさへなかつた。

されば御心の悲しさは何にか譬へらるべき、松を拂ふ嵐の音、草むらに鳴く蟲の聲を聞かるゝも亦斷腸の種となつて、夜の雁の遙かに海上を過ぐるにも都の空のみ望ませ給ふて居られた。

鴉の頭か白くなる時はあつても、都に歸らせ參らすべき時機はないのである。新院もかくとは覺悟されて居つた、されば崩御後の紀念にとて五部の大乘經を御手づから寫させ給ふがた、三年の日月を經て其の効を奏させ給ふた。遂に之を使者に托して、京都の仁和寺に送られて、

『願はくは鳥羽の安樂壽院に納めて吳れ、若し其の儀憚りありて困難ければ、せめては八幡山、高野山の中にでも納めたし』

と云ひ送られた。仁和寺法主なる覺性法親王は關白忠通卿へ此由を傳え、

させられたが、忠通卿より奏聞してよきやうに取りなされたけれども、御許しなくして終に

『其の儘に送り返へせよ』

とのことであつたので、御室より驀て勅命の如くに讃岐へ返送あつて、

『御とが重く候ふ故、御手跡たりとも都近くは置かれ難く候ふ間、願意到底力及ばず候ふにつき、爰に別封其の儘返送に及び候ふ、謹言』

と申し送られた。

新院には之を御覽じて、腸もさけ、氣も燃え立つばかりに怒らせ給ひ

『さて〳〵口惜しいことかな、兄弟位ひを爭ひて合戰する事は、天竺震旦等にもある例なるを、我れこのことを悔ひて、發心懺悔の爲めに御

經を書き、三年の日月を費し漸くにして出來たるに、其の筆跡をだに都のうちへは置いては貰へぬことか』

と仰せられて、舌を嚙み切り其の血を以て經の軸ごとに

『願はくは大魔王となりて、天下を惱亂し、この經を惡道に廻向して、恨みを散ぜん』

と書きつけ給ひて、千尋の海底に沈め給ふた。是より以後は髮も剃らず爪も切らず、御衣は柿色のすゝげたるものを着け、長頭巾を蒙り給ひ、眼輝きて惡念に耽けらせ給ふに至つた。

それより九年間御存命あり。長寛二年の八月廿六日に御歳四十六にて崩れさせ給ふたが、白峰にて煙になし奉つた。其の後ち京都の大炊御

門の地に社を建て其の靈を爰に迎へ祀られた。

鎮西八郎爲朝のみ久しく亂黨員のよく其の跡を暗まして、潛り廻はり近江の國の輪田と云ふ所に隱れ、郎等一人を道者となして、之に乞食をさせて、日を送り、筑紫に下るべき支度をして居つた處に、嘗つて入浴したが、乍之ちを官に告げるものがあつたので、佐渡兵衛重貞と云ふ者乍ち逮捕に向たが。偶々其の時は爲朝は浴を終りて湯壺から出で居れる所であつた、裸體のまゝ浴室にあつた杙を打ち揮り、官兵に向つて抵抗を試み、數人を擊ち殺したが、官兵は三十餘人の多數ではあるし、また爲朝は其のとき傷痍を病みて、身體の自由を失ふて居つたので遂に捕へられた、死罪に置くことになつて居つたが、世に稀れなる勇士なれば之

を殺すより暫らく命を助けて遠流に處せやうと云ふことになり、其の臂の筋を切つて伊豆の大島に流した。其の臂の創は五十日ばかりにして全く癒え、少しく腕力を減じたるも箭を用ゆることは初めにも增して長いのを使ふやうになつた、

『天子我れに大島を賜はれた』

と曰ひ、遂に大島を管領するのみならず。其の傍五島まで幷せ有して居つたが、舊との家來等來り屬するものもあり。島の代官三郎太夫忠重と云ふ者の娘婿となつて貢稅もなさず、後ち數年狩野介茂光に勅して攻めしめられたが、狩野介は伊藤、北條、澤、新田、藤田等諸姓の勇士を始め五百餘人を率ゐ兵艦數隻に搭乘せしめて至つた。爲朝は强弓に長

き箭を注ぎ、其の中の一艘を射つて沈没ししめた。衆避易して敢へて進まなかつたが、爲朝遂に自から其の島を遁がれ琉球に入つて琉球王の祖先となつたと云ふことである。時は二條天皇の永萬元年の櫻花咲き亂る〻三月のことであつた。是れより先き平治元年の冬は右衛門督藤原信頼卿と左馬頭源義朝と相謀つて、叛亂をなした。所謂る平治の亂の興つたときで、此の亂の騒ぎも隨分猛烈であつた。

地之篇　安祿山圖卷の怨恨

(二〇)平治の年號＝信西宮城を造營す＝信頼近衛大將を望む＝信西之を拒む＝安祿山圖卷進呈

平治の年號は二條天皇御即位の明年に改元されたるものである。二條天皇は後白河天皇の長子で、保元三年の八月十一日に禪を父の帝より昭陽舍に受け、其の冬十二月の二十日に大極殿に於て御即位の禮を行はせ給ふた。時に年十六であつたと云へば、其の平治元年は保元四年に相當れるのである。

世は苅菰と亂れて一時京洛に騒擾を極めたる崇德上皇が御謀叛の企てになりし所謂る保元の亂も乍ちにして鎮定し。其の亂に與つた上皇方

の人々は、訐死を遂げたる者の外は、孰れも或は捕縛せられて所刑を受け、或は深山幽谷人なき所に逃げ隱れて跡を暗まし、天下は暫らく熙々雍々亦安泰の温風に吹かるゝに至つた。然れども亂後京師荒れて國庫匱乏し、禁裡の御修繕も亦心の儘ならず、畏れ多きことなれども宮城柱傾き、殿樓雨漏り、當時天子は里内裏と稱へて、宮城の外に別に小さき御所を營みて之に遷御し雨露を防ぎ給ひしが、少納言信西之を觀て心に悼はしく氣の毒に思ひて、臣民たるものゝ之を對岸火災視し置くべきものならずとし、自から私財を投じて更に新たに宮城を造營し參らすることにした。

信西は山井三位永賴卿六代の孫、大學頭藤原季綱の孫、加賀掾文章博士實兼の子である。儒胤を受けて天性穎悟、學は和漢梵を兼ね、當時海内無雙の博識宏才と稱せられて居た、信西が妻紀伊二位朝子は後白河天皇の乳母となつて、御養育申し上げ奉つた居つた情誼に依つて、後白河の帝の御即位以降は取分けて、皇室の御信用厚く、大小の政事を心のまに執り行ひ、典禮の絶えたるを繼ぎ、朝儀の廢れたるを興し、永久の古例に倣ひ、大内に記錄所を置き、民の訟訴を聖斷に決する等のことも皆其の献策に依つてなつたものである。

信西は後白河天皇が御位を二條天皇に讓られたる後も、矢張り上の御信任減ぜずして、寵を專らにして居つた、時に伊豫三位中隆卿の子に藤原信賴朝臣と云へるがあり、其の官權中納言兼中宮權太夫右衞門督であ

つたが、是れ亦後白河在位の時代から寵愛を皇室に得、信西と意見叶はず、恒に互に相拮抗合つて居つた、信西は信頼を惡しざまに言ひ、信頼は信西を排斥し、事毎に折に觸れて互に陷れやうとして居つた。

二條天皇が讓位を受けて天子とならせ給ふたる後も後白河天皇には上皇の宮にて萬づの政事を聞召され給ひつゝあつたが、信頼は嘗つて竊かに奏して近衛大將を冀望した。依つて上皇は之を信西に告げて、

『信頼此の頃朕に對して近衛の大將を冀望するが、如何にするものにや信頼の近衛の大將は何う思ふか』

との御尋ねがあつた。信西は素より信頼を忌み嫌ひ居れることゝて、これに贊同を表しやう筈もなく、口を極めて反對し、且つ奏して

『叙位除目は國家の大典に御座候、されば官に任ずる人を選ぶことが最も肝要に候ふ何となれば官に任ずる其の人に非れば、上天の心に違ひ、下人の情に乖きて取り返しの出來ぬ失態を生みて、國家の禍は之より醸されることに御座候ふ。故に往年白河上皇が大納言藤原宗通を以て大將にしやうとせられたるにあたりて堀河帝聽き入れ給はず又故鳥羽法皇が中納言藤原家成を以て大納言に昇任しやうとせられたるに諸公卿方以て不可なりと致され候、大納言すら猶ほ輕々しく人に授けぬものを、況して近衛の大將をや、若し信頼を以て之に任じ給はば恐くは彼れの驕奢を致して自から天の戒めを受け、禍敗を取るともあらん、さすれば信頼が爲めにも之を憫然には思召し候はぬか、願は

くは少しく聖思を留めさせられ給へ』

と奉答したが、上皇には御悟りもなく、却つて信西の奏聞に對して不興の色が見えた。信西は不文不武にして諂諛是れ事とし上の心を迎へて寵貴を肆にし、求めて飽くことなき信頼をして決して思ふ儘に其の意をなさしむべからずとなし、唐の安祿山が奢りを極めて唐朝を亂したる事跡圖三卷を畫き、其の卷尾に題して、

『唐の玄宗は近世の賢主なり。然り而も其の始めを愼み、其の終りを棄つ、泰岳の封禪ありと雖も蜀都の蒙塵を免れず、今數家唐書及び唐曆唐紀、楊妃内傳を引き、其の行事を審かにし、之を畫圖に彰はす、伏して望む後代の聖帝明王の此の圖を披きて政敎の得失を愼まれんこ

とを』

と。之を上皇に進呈して御覽に供した。其の意藤原信頼を唐の安祿山に比し、重く用ゐ給ふこと勿れと諷諫したのであつた。

（二一）信頼遂に叛心あり＝源義朝と結托す＝平清盛熊野に詣す＝信頼等其の虚に乘ぜんとす

右衛門督藤原信頼卿は少納言信西が己れの近衛大將となることを拒み且つ其の上に我れを唐の叛賊安祿山に比して、之が任命の障碍をなしたることを聞くや、大に怒り且つ心に之を怨むこと深く、遂に清盛に結托して其の武を借り恨みを晴らさうかとも思つたが、當時清盛は保元の戰功に依つて太宰大貳の官職を辱うし居れる上に、許多の所領も賜は

りて心に滿たざるところもなく、加之信西が子成範の妻は清盛が娘にして、清盛と信西とは姻戚の間柄なれば、このことを清盛に謀つたとて同意することはなかるべきのみならず。或は却つて事の失敗を招くこともあらうかと慮り、この方はよしにして遂に左馬頭源義朝と相結托し其の武力を借ることにせられた。

義朝は保元元年の戰亂に官軍に屬して、院軍を討ちたる勳功に依つて左馬頭に任ぜられたるも近頃平家の勢威漸く強く、其の資望が己れの右に出づるを見て、心恒に怏々として安からぬ思ひをなして居たる際なれば、一も二もなく諾して信賴の依賴に應ずることにし以て

『如何なる御大事にても承りて一方の固めを仕るであらう』

と答えた。信賴卿は乃ち遂に權臣信西を除きて君側を清めると云ふの名の下に、權大納言藤原經宗、右近衛中將藤原成親、檢非違使別當藤原惟方等と共に心を戮はせ謀叛を企て、際に乘じて大事を擧げやうとせらるゝに至つたが。それよりは恒に所勞と號し出仕もせず、中納言源師仲卿の伏見の別邸に引き籠りて偏へに武事を講じつゝ、その準備に餘念なくして、時機の至るのを待つて居つた。

月日のたつは早いものである。年華逝水のごとく、白駒の過ぎ行くは彈丸に似たりなど云へるが、實に平治元年も花の春とたち、綠の夏は夢の間に、紅葉の秋も暮れて、既に今は木枯しの北風寒き冬十二月の四日と云ふに至つた。偶々當時京師にて一方の武權を握りて源義朝と拮抗

せる平清盛は、嫡子左衛門佐重盛と同族一門及び郎等を引き連れ、紀州の熊野權現に參詣した。

我が帝國は元來武を以て國を建つ、建國以來久しく兵馬の大權は上皇室にあり、天皇が御自身に總大將として軍務に服せさせ給ふたることは明治革新後今日に於ける御聖代と同じかつた者であるが、それが中世は下に移つて遂に武臣の手に歸した。殊に天慶より寛治の頃に及び屢々關東の邊境に據つて、亂を作したるものがあつたが、源平の兩氏が、更るく に自家に馴養つて居たる家僮隷屬を率ゐ往きて之を鎮定した。而して其の當時は皇室が軍事に御意を注がせ給ふやうのことがなかつたは勿論武門と相家との族別さへ出來て、武事に關することは宰相家に屬する

ものすら顧慮することなきに至つた、遂に保元、平治の頃に及んでは軍隊を率ゐて陣頭に向ひ、攻城野戰以て騷亂鎮定の任に當るものは源氏平氏の兩族が專有するやうになつたのである。

されば其の頃は源氏か平氏かゝ加はらぬと軍は決して出來ぬのであつた。是れ其の當時に於ては別に國に兵隊を置かずして、其の兵士は皆この兩氏に附隨した所謂武士と名の付くものゝ種族の專業の如くになつて居つたからである。而して保元以降は源氏にては義朝、平氏にては清盛この兩人が全く其の氏族の中心となつて居た。されば源義朝と平清盛が保元以後平治の頃に於ける地位は武家の東西兩横綱たるものであつた。義朝が東の横綱であれば清盛は西の横綱で、この兩横綱の關取が居

らねば、もはや當時の戰爭は角力にはならぬのであつた。

然るに今や淸盛は熊野權現に參詣す。殊に其の子重盛及び其の家奴までも共に詣でたので、それが又數日間は彼方に滯留すべしと云ふのである。されば信賴卿は此の機逸すべからずとして、義朝を招き寄せて、力を極めて信西が專橫を數へたてた上、

『今更に事新なしく改めて云ふまでもない事ではあるが、信西がこの頃の擧動は如何に思はるゝぞ、彼れは天下の政事を心の儘に行ひ、依怙ひいきの沙汰のみ多く、自分の子供等には恣に官を與へ位階を進めて、榮耀榮華をなさしめ、自己の腹を肥やして他を顧みざる佞奸極まる曲者……、此の入道が久しく天下に居りては國をも傾け、世をも亂

すべき禍ひをなすに依つて、我れは豫ねゞ云へる通り國家の爲めに此の者を除きたく思ひて其の謀を運らしつゝあることは、卿も既に承知のことならんが、實は卿の一家のことを思ふても氣の毒で堪らぬ。我れが云ふまでなきことなれども、大貳淸盛も其の娘を信西が伴成憲の妻に遣はし、姻戚となつた以降と云ふものは、兎角に源氏の人々を押へて陷れ、平氏を引揚げやうとのみ致して居る。卿自身祖家の爲めも思ひていよ〳〵一層奮發をされたい、聞けば淸盛は今日熊野權現へ參詣致したとのことであるが、彼れも熊野附近和歌浦邊を見物するとの由なれば、暫らくは歸つて來まいと思ふから、其の中に大事の實行を致さうではないか？』

と仰せられた。義朝も近頃益々自分の地位が危くなり居ることは承知して、如何にもして之を挽回しやうと思ふ心の愈々切なるときのをりたれば、莞爾として

『なる程今はよき時機で御座る、縱令ひ清盛が在京しても恐るゝ程では なきも、信西の荒料理をいたすには彼れが居ぬときのことで御座る、のみならず清盛の居らぬ時信西の荒料理をいたし、清盛のど肝を拔くのも亦一興で御座らう』

と答えて、且つ義朝は更に語を續け

『我れとても自から進んで此の事は贊成いたして、危きに臨みて見やうとの決心は誠に閣下の只今の御話にもある如く、我が家系の爲をも思ひ居る次第にて、去る保元に我が一門の輩多く朝敵となつて、親族皆討死若しくは嚴罰を受けて刑場の露と消え失せたり抔いたし、今は我れ一人となり居ることなれば、時機至れりとして清盛が我が源家を蔑にし、覆滅の謀をなせるは深く怪しむにも足らぬ所にして、我れも爰で奮發して我が家の浮沈を定めやうとの決心もあれば、時に上への便宜の御取りなしを宜しく願ひ奉る』

とあつた。信頼卿は則ち大に喜び、

『然らば合戰に就ては萬事を卿に一任するから、總べて粗忽なきやうにして呉れ』

と仰せられて、柄鞘共に銀を卷きて、いかめしく作りたる太刀一腰を取

出し、前祝ひのしるしにとて之を義朝に賜はられた。義朝は之を受取り

『貴重なる品の御下賜有難く拜領致す、然らば義朝が胸の方寸に依つてよく果し得るや否やは時の運に依るべけれども、力のあらん限り盡瘁致すで御座らう』

とて引き退き、白と黑との斑の太く逞ましき駿馬に鐙鞍を置いて玄關近く引き立てさせられたが、時は既に夜に入つて居たので、松明をふり擧げ皓々と之を照らし、其の馬を見て、背を撫でつゝ

『戰爭に出ては馬程大事なものはない。我れも此の龍蹄にていかなる强き敵陣たりとも蹂躙り大功を立てやう……』

信賴卿は立ち上り、御覽あつて、

『愉快じや、快じや、義朝うまく願ふぞ！』

と仰せられたが、義朝公は更に

『我れが敵に對する胸算は既に定り居る、御心を安んじ給へ、合戰は總べて軍勢の多寡には依らぬ、謀略を以て第一となす。さは云へ、又小は以て大に敵せぬとも云へるありと申せば、彼の賴政、光基、季實等をも召させ給はれんことを冀望に堪へず』

と云ひ置きて歸館せられた。

（二二）信西天象の變異を察して兵亂を知る＝禍自己に及ぶを恐れて奈良に逃げんとす

其の後藤原信賴卿は、急ぎ檄を諸國に飛ばし、內々志を逞うする

こと能はずして心恒に不平を懷けるの武士を召し出し、同志の糾合に努められたが、忽ちにして五百餘人の精兵を得た。乃ち左馬頭源義朝を大將として之を率ゐしめ、九日の夜半を以て後白河上皇の御所たる三條御殿を包圍襲擊し、且つ少納言信西の第をも襲ひて、以て其の宿怨を晴らさしめやうとせられた。然るに之に先たち其の日の正午頃であつたが、白虹が日を貫くと云ふ天象に變動を起した。信西はかねて天象星占の術に通じて居つたから、之を見て叛逆の徒があつて今夜上皇の御所へ押し寄せ來ることがある者と知りたれば、急ぎ此の由を後白河上皇の御耳に達し參らせやうとして上皇の御所に赴かれた。

をりから後白河上皇は種々の御慰みあり、興に乘じさせられ、面白く樂しさうに遊戯をなして居らせ給ひ、信西の子供等も皆伺候して打ち混じて、歡趣闌はなる頃であつたので、其の興を醒し參らするも善からぬことに思ひて、御所の女官を喚びて仔細を傳奏に及ぶやうに依頼し置きて退出し、其の宅に歸り、妻の紀伊二位にもこの天象の次第を話し聞かせ、且つ更に

『是れより我れは奈良の方へ行くが、子供等へも之を知らせてやれ』

と云つて出られた。紀伊二位は

『妾もこのことを聞きては何んだかこの家に居るは怖い、同道をなさしめ給はずや』

とて歎き附かれた。信西は

『マア子供等も居ること、のみならず或は遁がれるかも知れぬ。殊にこのたびは少し仔細があつて、其許を連れ行く譯には行かぬ』

とて、さまゝに云ひなだめ置きて、侍士四人を伴ひ、桃花毛の愛馬に乘り、いゝねり成澤を連れて大和路を指して落ち行かれたが、石堂山の後なる信樂の峰の徑路を分入り通らるゝ時に、又々天象に變異があつた。歲星が壽星宮に在りて、火星晝顯はる。是れは星占家の說に據るときは「忠臣君に代りて生命を落す」との天變であるので、信西は大に驚きて『忠臣君に代りて禍を受け、生命を落すとすれば恐らくは我れのことであらう？』と思案しつゝ、山路をたどりて居られたが、信西主上は雲を笠に何處に行くともなく、實は都の亂を豫想して逃げ出でたのである

ので奈良に行くとは名のみ、いゝかく人なき方にと過ぎ往く、急ぐでもなければ信樂の峰の山路を越えたる頃は夕陽既に西山に春き、山寺の鐘聲耳を掠め、山鴉塒を求めて還る日暮れ時となつた。信西は乃ち其の山中の一樵夫の家に就て侍士をして

『我れ等は奈良に行くものなるが、此の邊は馴れぬ旅路なるに、路を迷ふて難儀をする、今宵一夜を當家にて明させては呉れまいか』

とて宿泊を求めしめられた。其の家には年齡古稀にも近かいかと見ゆべき老婆が一人居つたが、

『妾の家は老爺と妾との二人くらしで、こんな穢しいところ、貴公達高貴なる御方の宿とては出來かねます、殊に此處は山奥の事なれば薪

炭を作りて京に賣り出しなどして僅かに其の日暮らしをして居るもの夜の召しものとても差し上げやうことも出來ないから……』

と斷つた。信西之を聞いて馬より降り、

『ナニ別に何を喰はねばならぬと云ふでもなし、又立派なる夜具を着ねば宿泊れぬこともなからうし、なり得らるゝことなら宿めて貰ひたい我等は京都のものなるが少し仔細あつて大和に行くものなれども、事に依つたら一兩日厄介を掛るかも知れぬ、何うだらう？、なるべくは願いたいものぢやがの』

と云はれて更に願ひたき意を示された。老婆は乃ち

『デハモウ程なく老爺も歸つて來ませうから、老爺に相談して何とか申し上げますることにしませう、暫らくの間お待ち下さりませ』

と云つた。信西主從一同は

『何分にも宜しき相談をして宿泊下さるやうに願ふ』

と、ときに後の山道から薪木を背負つて此の家の方に來るものがあつたその年齡今信西等が宿泊を求めて話し居る老婆と相伯仲の間で一二歳は年上かと見ゆる老翁であつたが、後庭に着くと、背の薪木の束を卸し、信西等に會釋して、臺所と食堂とを兼ねたる座端に這入り腰を掛けた。今まで話し居つた老婆は、

『亭主が歸りましたれば相談して見ます』

と云つて立つた。信西

『ドウか……』

それから老婆は老翁の傍に行き

『老爺さん疲勞たでせう、今日は少し歸りが晩いので』

と老翁の草鞋の紐を手傳つて解きつゝ云ふ。老翁は

『荷が少し重うてのう』

と答えた。老婆

『判明れば迎へに往つてあげるのであつたのに……』

と云つたが、既に草鞋も脱いで仕舞つたので、老婆は老翁に向ひ

『今表口に居らるゝ御方が宿泊て吳いまいかとのことであるが、何うしたもので御座んせう』

と相談の火蓋を切つた。それより翁婆夫婦は少焉間密語して相談して居つたが、老翁の最後の答には

『デハ宿泊てあげませい』

と云ふのであつた。依つて老婆は信西主從の待ち居る所に來たり、

『老爺に相談致したれば宿泊てあげると申しますから、野宿をしたとの御覺悟でお宿泊なさいまし』

と云つた。信西

『されば宿泊て吳れるのか有難い、何も馳走はいらぬから此の六人のものを寢させてさへ吳れれば此の上はないぢや』

老婆

『デワお這入り遊ばせ』

と案内する老婆の後に隨ふて信西主從は這入つて行つた。

其の夜に於ける信西入道の夢を結ばれし間の感想は果して如何にあつたであらう。素より普通の人の知ること能はざる所であつたに相違なからう。即ち天象の變異に依つて、以て帝都に變難の興るべきことを察し又其の變難が自己の身及び其一族にも及ぶべく、而してその妻子は之を帝都に置き、己れのみ遁れ出でられたることなるに旅の宿泊とは云へ昨日まで金殿玉樓の裡に人となつて未だ嘗つて目擊したこともなき山奥の樵夫の貧家破窓の下、襤褸で作られたる垢染みたる夜具の中に一夜を明されたること、されども東天白んで夜は明けた。信西入道は益々帝都の

模樣、殊に妻子は如何にして居やうかと之が案じられるので、伴ひ居たる侍士の一人なる右衛門尉成景に對して

『昨日の天變如何にも氣にかゝる、汝御苦勞ながら京都の樣子を見て參れ』

とあつたが、成景は急ぎ悍馬に鞭うちて、都の方に向つて出發した。

（二三）義朝三條殿を襲ひ上皇及び主上を幽閉す＝三條殿並に信西の第兵火に燒失す＝殺傷無數＝信西生埋せらる

左馬頭源義朝は遂に信賴卿の一味の大將軍として、同志の武士を率ゐ、步騎總勢五百餘人、少納言入道信西が京師を落ち出でた夜の夜半過ぎを以て夜襲を試み、後白河上皇の御所なる三條御殿に押し寄せ不意

に御殿を取圍み、謀を以て源中納言師仲卿をして上皇に奏せしめ

『年來陛下の御親任を蒙り居る信頼このたび信西が讒言に依つて擊たれるとの風説專らなるにつき、暫しが間にても生きて居りたければ、東國の方へなりとも罷り下さらばやとて今の門出に當り一たび龍顏を拜し奉りたく候ふ、尙ほ實は御一緒にもと思へば迎ひのために參上仕つり候ふ』

と云ひ御車を御殿の玄關近く舁き寄せしめたが、後白河上皇には之を聞召され、大に驚かせ給ひて

『誰れが信頼を失なはんとはせるものぞ』

と宣はれつゝ呆れさせ給ふをりから、はや

『信頼を燒き擊ちにせよ……火を信頼の邸に懸けよ！』

と云ふ聲が聞えて、三條御殿附近も何となくもの騷しさうにあるので、上皇には周章狼狽ながら、師仲卿が舁き寄せしめたる車に乘られ給ふた。上皇の御妹なる上西門院も同じ御所に居させ給ふたが、是れも同じ車に召させられた。依つて信頼卿は義朝、光保、光基、季實等と共に上皇の御車の前後左右を打ち圍みて擁護し奉り、大内に入れ參らせ、一品御書所の小舍に押し籠め奉り、軈て又主上をも黑戸御所へ幽閉し奉つた。其の守護役としては佐渡式部大輔重成と周防判官季實の兩人が任に當つたが、重成は保元の亂のときも新院（崇德上皇）が御室の寛遐法務の坊に置かれさせ給ふたるにも守護役を勤め、新院が讃岐に

謫竄の身とならせ給ふたをりは、鳥羽まで護送し奉りたる者であるので、重成は兩代の君を幽囚し奉つたる監守番を努める惡い實に腹黑き人かなと世の人々の中には評せし者もあつたと云ふことである。

尋いで義朝は兵士に命じて少納言信西が官舍なる姉小路西洞院の第に火を懸けて燒き討ちにしたが、婦女子家僮等のあわてゝ迷ひ出でたるをも信西が姿を替へて逃げるのではあるまいかと、見當り次第に之を捕へて斬り殺した。其の他市坊所々に火を放ち、三條御殿も亦兵火に罹つて燒失したが、時は暴風吹き荒みて居つたので、猛火烈しく燃え立ち、忽ちにして四方に延燒し、焰煙を吹きつけ、風下に當つた方に住み居たるものは、この火の爲めに燒死を免ぬかれるものは稀れであつたのみならず、義朝等が率ゐる兵士は猛火の四方に待ち受けて、卿相雲客女官に至るまで火を避けて遁れ出るものがあれば、是れも亦信西の一族であらうと云ふので、或は射殺し、或は斬り仆したれば、火に燒かれまいとして出づれば、兵隊の矢に中り或は劔に觸れて斃れる。火にも燒かれず、兵隊の矢にも中らず劔にも觸れぬものは、井戸に陷つて命を落したが、其の光景實に筆紙に名狀すべからざる所の無慘を極めた。

右衛門尉成景が木幡峠にまで來つたときに、信西人遣の舍人なる武澤と云ふものが急ぎ此方に來たり居るに出遇ふた。武澤は成景を見て『前夜京都は大騷動起り、姉の小路の御宿所も燒き拂はれ今や無慘のありさまとなつたが、是は右衛門尉殿が左馬頭殿と語らひ謀を合せて

入道殿の御一門を滅し給はるゝ御企てと承る。就ては此の由を告げ參らする爲めに奈良に赴くが、入道殿は奈良の何處にあるか』と尋ねた。成景は之を聞きてさも驚きたるらしくして、下臈の賤しきものに信西入道の居所を知らせては或は惡しかるべしと思つたので、

『それは感心なことで……、能くこそ告げには參られたのう入道殿には春日山の奥に居らるゝから早く赴いて告げ知らせ給へ』

とて、其の道筋まで詐り敎え置き、且つ

『自分は京へ上るから、入道殿の所に赴きたれば、自分に會合したことをも序に述べ置いて呉れよ』

と云ひ置き、成景は武澤に別れ、直に信樂の麓田原の奥に歸り、少納言

入道信西に會見して、武澤より聞きたる都の騷ぎの次第を逐一入道の耳に達したが。信西入道にはこれを聞き終りて、

『さればこそ信西が見たる天象の變異の知らせは違はぬと覺ゆるぞ、忠臣君に代はり奉るとあれば、此の處生命を捨てゝ皇恩に酬ゐ奉るべきか、併し息の根の未だ絶えずして此の世に生き永らへ居れる程は佛の御名を唱え參らせやうと思へば、其の用意を致して呉れよ』

とて、穴を地に鑿らせ、其の四方に板を立て並べ、信西入道を之に入れ今まで隨伴し居つた四人の侍士の髻を切つて、之を殉死の體になして入道を入れたる穴の傍に埋め、且つ四人は入道に對して、等しく口を揃えて

『是れより此の世にてはまづ訣別と思へば、最期の御恩には我等四人のものどもへ夫れ〳〵法名を賜ひ置かれたし』

と冀望した。信西も亦云はるゝやう

『我れも今汝等に別れ、此の世にては見納めなれば、今まで汝等が我れに仕へて忠節を盡して吳れたる報ひに何とかと思ひ居たる際なればよし汝等の望み通り法名をつけ與へて遣るであらう』

とあつて、則ち左衛門尉師光に西光、右衛門尉成景に西景、武者所師清に西淸、修理進淸實に西實と命名せられた。

聽て少納言入道信西は大になる竹の節を貫ぬき通して、自己の口に當てゝ土を切り入れ埋めしめられた。師光等四人の侍士は入道を埋めた側にて暫し歎いたけれども、此の上は何んとしやう術もないので各々双袖を涕淚に濕ほしつゝ京都を指して歸つた。

（二四）信西子息等免官＝信頼一味の者の行賞＝義平任官を辭退す＝光頼卿會議に依りて硬骨を顯はし＝退出に際し二弟を戒む

罪なくして配所の月を眺むると嘲ちた人もあるが、政治家が權勢爭奪の場合には往々此の現象を見るもので、そのとき無辜のものが寃罪を受けて竄謫の身となり、刑場の露と消え失せた例は實に古今の史乘に稀れならぬ所である。其の故は强者となつたものゝ敵の味方であつたとか、其の同族であるとか云ふので以て、刑に處するだけの犯罪はなくても、將來己れの地位を危ふするものであらうと認めらるるものは、悉皆之を

排除する爲めの故意の刑罰が行はるゝからである。

右衛門督中納言藤原信賴卿は少納言入道信西が嘗つて己の冀望したる近衛大將の任官の障碍をなしたる爲め、左馬頭義朝等と謀つて兵を大內に進め上皇主上を押籠め奉り、信西の同類であらうと見認めたものは卿相雲客女官の區別なく、其の事實の眞僞はいざ知らずとして多くを殺傷して以つて一時勝者、强者の地位を得たが、當時信西入道の子息が五人あつた。即ち嫡子新宰相俊憲、次男播磨中將成憲及び權右中辨貞憲、美濃少將脩憲、信濃守是憲なるが、孰れも官を免じ闕官を仰せ付けられ、聽てそれ〳〵重き刑に處するべく定められた。素より此れ等五人は信西の子息とは云へ、信西すら唯上皇に對して諫言したまでゝ、信賴

卿に對して陽に抗敵を試みたることはないのであるから況んや子息等をやである。然るに斯く定めたのは信西の子息であるからとて、他日を慮つた處置である。

既にして信賴卿は自から大臣大將となり、左馬頭義朝以下夫々行賞任官の沙汰に及ばれたが、義朝には封邑として播磨の國を與へて、播磨守に任ぜられた。佐渡式部大輔重成は信濃守に、多田藏人太夫源賴憲は攝津守に、源兼經は左衛門尉に、康忠は右衛門尉に、足立四郎遠基は右馬允に、鎌田次郎正淸は兵衛尉にするの任命があつたが、鎌田正淸はこの時に正家と改名した。

義朝が嫡子に源太義平と云ふがあつた。嘗つて叔父の義賢と私鬪して

之を殺したと云ふので人呼んで惡源太と云つて居つた。當時關東に在り母方の祖父三浦介の家に寄寓して居たが、わが父義朝信賴卿と謀を戮せ、兵を擧げ京師騷ぐと聞き、戎馬に鞭うつて急ぎ西上したが、入京して見れば一時其の騷ぎは鎭定に歸して、恰も行賞任官のときであつた。信賴卿は其の來たりしを見て、大に喜び、

『汝義平このたびの任官の間に合ふやうに入京致したること此の上の仕合やある。大國か小國か任官叙位も汝が冀望の儘に進め參らすべければ、合戰も機に臨んで又能く仕れ』

と仰せられたるが。義平は案の外に之を懌ばずして、

『保元の亂れのときに、わが叔父鎭西八郎爲朝を左大臣賴長卿から奏して臨時の除目を行はれ、藏人に任ぜやうとせられたれば、急々なる除目かな、この爲朝は鎭西八郎にて事足る、今となつて藏人となつたとて何かあらんとて、辭退申されたるが誠に是れ道理あることゝ存ずる。今この義平とてもこの任官除目畏れ多けれども何の意味やら了解に苦まざるを得ぬ。夫よりは一隊の軍勢を賜はりたし、さすれば義平急ぎ安倍野に驅け向ひ、これにて强敵淸盛が熊野より下向いたすを待ち受け、彼れが淨衣のみで上り參る處を眞中に取り籠めて一度に擊ち彼れの郞黨を鏖にし、其の首を獄門に梟して後ちに大國も小國も封邑を受け、又任官叙位も拜受仕る、まづ夫れまでは東國にて兵士共にも克く呼び覺えられて居れば、本の惡源太にて居ませうよ』

と、何の忌み憚る所もなく申したが、信頼卿は之を聞き、

『任官の沙汰は汝がいやとあれば、それに任かせ置かうが、兵を率ゐて阿部野に驅け向ひて清盛を迎へ討つの策は疎略の申し條ならずや、安部野まで馬の足を疲らして何にせん。まづ清盛が歸り來るに任かせ置きて、之を都に入れて中に取り籠めて擊たば何程のことのあるべきや』

と仰せられて、義平の請ふ所の兵は賜はられぬのみならず、清盛のことには注意なきやうであつた。他の其の座に列して居たるもの共も誰れとて一人の義平の云ふを可とするものなく、偏へに信頼卿の意に從ふことをのみ努めたが、そこで義平の任官沙汰は遂に止んだ。

大宮太政大臣伊通公と云へるは其の頃はまだ左大臣であつたが、才學智德その時代に最も優れさせて、滑稽の才があつた。嘗つてこのたび信頼卿の旨に依つて行はせられたる行賞任官の辭令を御覽じて、

『武士どもゝ思ひの如く官階陞任も出來たが、人を多く殺したる許りで官位を進めるのなら、三條御殿の井は多く人を殺したが、これは何故に任官の御沙汰に及ばれぬことだらう？』

と云つて笑はせられたと云ふことである。信頼卿は當時僅少の間ではあつたが、衣冠供禮總べて天子に僭擬し、百官の上に座し庶政を聽斷したるに、百官敢へて仰ぎ視るものはなかつた。唯獨り左衛門督藤原光頼卿のみは屈せずして、信頼卿の擧動は過分とし出仕もなかつたが、信頼卿は嘗つて詐り詔と唱へて、大に公卿を會して事を評議せられやうとし

た、光賴卿もこのたびは參内して議事の次第を承るとて、殊にあざやかに束帶引き繕ひ、蒔繪の細太刀をおとなしやかに佩ぎ、桂右馬允範能に雜色の裝束を着けさせ之を引き連れ、

『もしもの事もあらば、汝が手に懸けてこの光賴の首を急ぎ斬り取つて逃げ免れよ。賊の手に辱めさせて吳な』

と命じつけて入られた。信賴卿が一の座にて夫より群卿其の下に席順を作つて列座して居られたが。光賴卿は之を御覽になつて、

『こは不思議なる朝班なるかな、人は如何にするともよいが、我れは左衛門督なれば右衛門督の下に着席はならぬわい』

と仰せられつゝ、徐ろに進んで信賴卿の上に座せられ、笏を端し、下重

の尻を引き直し、文紋を繕ひ、聲を勵まし、

『今日は衛府督が一座をなして居らるゝが、議する旨ありて召され、若し參らぬものは死罪に行はるとやらん承りたが、抑議せらる所のことは何にて御座るのか？』

と尋ぬられた。信賴卿は默して何等物をも宣はせず。他の着席の諸卿も亦一言の返答もなきのみか、議題の沙汰もない、程經て光賴卿は立ち上り、

『議することのないのなら退る。用なきに惡う參らせられたるものかな』

と云ひつゝしづ〳〵と退出せられたが、弟の惟方及び經宗の兩朝臣を呼びて、敎へ諭すに君臣大義の在る所を以てし、且つ更に、

『我が家祖先勸修寺内大臣高藤が延喜の聖代に仕へてより光頼が身に至り、即ち高藤、定方、朝頼、爲輔、宣孝、隆光、隆方、爲方、顯隆、顯頼及び我れで實に十一世に及ぶが、當家にはさせる英雄はあらざれども、偏へに有道のものゝみにして善政でなくば奉公せず、忠良のものにあらざれば事を共にせぬのに、今汝凶豎に黨して累代の家聲に創を負はせやうとするか、口惜き事ぢや』

とて、熱涙數滴乍ち光頼卿の眼より落ちて、持たるゝ笏に點じたが、光頼卿は更に語を續て、

『右衛門督は汝等にこのたびの企てに付き、何も歟も話し合せ居ると聞く宜しく相搆え……搆えて其の際を伺ひ、主上、上皇を守護し參らせ、玉體を恙なくおはします樣に圖り、太宰大貳清盛等が還り來るを待ち居よ』

と云ひ、依つて尙ほ光頼卿は惟方朝臣に向ひて、

『主上は何處におはしますぞ』

惟方　『黑戸御所に……』

光頼　『上皇には……』

惟方　『一品御書所に』

光頼
『内侍所の御鏡は』
惟方
『温明殿に』
光頼
『劍璽は何處に納め在る』
惟方
『夜の大殿に……』
と答えられ光頼卿には惟方朝臣と共に問答をなして居られたが、光頼卿の後の方に顧られたれば偶々朝餉所の窓の中に人影が在るのが見えた

光頼卿は之を見認めて、更に惟方朝臣へ、
『朝餉の方に人音のしてあの櫛形の窓の中に人影の見ゆるは何者か』
と尋ねられた。惟方朝臣は、
『あの所は右衛門督殿が住み居らるれば、其の方の女房達の居らるゝのであらう』
と答えられた。光頼卿は之を皆までは聞き終らずして、
『彼所は主上の住まはせ給ふべき所なるに、信頼共が住み、君をば黒戸の御所に遷し參らせたりとは、代は末なれども日月はまだ地には落ち給はぬものを……多き天神地祇の神々は王法を如何守り給ひつゝあるにや、異國には往々世に亂臣在りてかやうの例あるを聞けども、我が

朝にては未だ嘗つて斯くの如きの先蹤を聞かぬものに……』

とて、因つ歔欷泣涕して暫らく憚らせらるゝ所もなかつた。既にして光頼卿は涙を拭ひつゝ、

『やよ經宗惟方兩人に重ねてよく云ひ置くぞ、平氏の輩還らば匡復のことは確然なるに違いないから、汝等は生命を的にかけて主上、上皇の身の安泰ならせ給はすることを圖るに決して油斷あるなよ』

とて、悄然として出でゝ我が第に向はれた。

（廿五）六波羅の使者清盛を追跡して切目に會す＝清盛敵を恐れて歸洛を難んず＝重盛等勸めて終に還る

太宰大貳平清盛の熊野參詣は年暮れ近き冬、旅路なれども過ぎ行く路傍の山野には常盤木などありて、冬も葉を保ち、枯木の間、或は緑、或は黄、或は赤を彩どり、奇岩怪石之に風致を添へ、妙手の圖畫の如きもあれば、ぬくき日和の日などは旅心地よく、強ゐて急がぬ道の數日を經るも未だ參着し能はずして切目の驛舍に宿泊して居たが、乍ち六波羅より差し立てたる早馬の使者が追跡し來つて、清盛に會見を求めた。清盛には何事の出來たるにやとて急ぎ會見せられたるに使者は清盛の膝元近く進みて、

『このたび我れを使者として急ぎ差遣されたる次第は、去る九日の夜右衛門督信頼卿左馬頭義朝殿と謀を合せ、兵庫頭源頼政、伊賀守源光基等のものどもと與に兵五百人を引き連れ、三條御殿を取り圍みて

之を燒き、並に少納言入道信西殿の官舍をも燒き拂ひ、討死負傷は非常の多數にて、遂に上皇及び主上を禁内に押し籠め奉り候ふ急ぎ御歸京あるべき者、故に敢へて之を告げ參らす爲め參りたり』

とて、其の變を申告に及んだ、並居たる者等之を聞いて、

『サア大變が起つたぞ』

とて愕然驚いたる樣子であつたが、清盛は急に嫡子左衛門佐重盛を始め、其の時の隨伴の者ども膝元近く喚び集め、使者が申告の次第を知らせ且つ云はるゝやう、

『急ぎ是れより下向致すべきか、此處まで參詣して最少しと云ふになつて參詣せぬのも殘念であるが、如何にすべきや』

とあつた。左衛門佐重盛進み出でゝ、

『私共の考えにては早速是れより京都に引返へし、信頼等の兇徒を追討するの任に當り、一刻も早く主上及び上皇の大御心を安んじ奉るの外なきことゝ存ずる。父上には是れまで來て參詣せずに歸るも殘念などゝ宣はすれども、熊野御參詣も現世の安穩、未來の幸福を祈らせ給ふに外ならざるべき歟、さすれば未來の幸福のことはさて置き、國亂れて現世の安穩と云ふものが得らるべきや、其の上使者の申す所に據れば主上上皇には押し籠めさせられ給へると云ふにはあらずや、いかで我等武臣の任務として是れを救ひ奉らずして久しく等閑にし置るべきか、神は非禮を享けぬ者と承る。何を苦みかく宣はせ

給はするものぞ、一も二もなく速かに御下向然るべき事に存じ奉る』

と申されたが、列座の他の人々も同じく、

『只今左衛門佐殿の申さるゝ所至極尤もに存ずる。何分にも是れより早速引き返すことに致さうでは御座らぬか』

と賛同せられた。清盛、

『それは我れとても、さには思へども更に兵器の携帶なく、鎧一領だに用意致し居らぬものを如何すべきや』

と嘆息して仰せられたれば、筑後守家貞

『其の分なれば御心配は御無用に存ずる、私共初めより豫めこんな事があるやも知れぬと存じたれば、其の用意は致し居ります』

とて、長櫃五十棹を重げに舁せたりしを是れへとて舁き寄せさせ、蓋を開けて、

『之を御覽じあれ、この中を』

とて、甲冑五十組、それ〴〵箭まで取揃へて出された。清盛御覽あつて、

『汝が用意の程は神妙ぢや、併し弓は如何に……』

と仰せられた。

『さればで御座る、その等の用意は勿論ぬかりは致さぬ』

とて、長櫃を擔ひ來たりたる竹の枴中に節を突ぬいて其の中に弓を入れて居つたので、之を取り出した。驚て家貞は滋目結の直垂に洗革の鎧着て太刀を脇挾み、

『大將軍に仕へる者はかく用意致し居るものぞ』

と云へば、他の人々之を見て、

『天晴のお心掛け』

と感じ合ふたと云ふことである。乃ち太宰大貳を始め左衛門佐重盛其の他一行悉く武裝したが、それから清盛には使者を熊野別當湛增が許に立てゝ援兵を出だせと促がされた。偶其の時湛增は熊野の南方程遠からぬ海濱田邊と云ふ所に行きて居つたが、直に其の命を奉じ騎兵二十を送つて來た、又之を聞いた湯淺の城主湯淺宗重も兵三十人を率ゐて來り會したので、爰に大貳清盛の兵は步騎合して總員百人に及んだ。依つて清盛自から總指揮官となり、兇賊信賴卿を征討するの任に當るべく、切

目の驛にて部署を定め、時日を移さず京師に入りて、兇黨の首を得て之を獄門に梟し、二聖の艱難を救ひ奉るべしとて勇んで引返したが、既にして誰れが云ひ出したともなく、その軍勢の中に噂を立てるものがあつた、そは別の事ではなかつた。惡源太義平が精兵三千餘を率ゐて、攝津の安部野に出で、我れの歸り路を待ちて邀へ擊つと云ふのであつた。大貳清盛には之を聞き、忽ち恐怖氣を催されたのであらうか

『今聞けば惡源太が三千人にて我が歸洛を待ち、安部野に出張し居れるとのことなるが、この僅か百人と云ふ無勢で、彼れの三千人と聞ゆる大勢に取り圍まれたれば到底勝利の見込は立たぬ。敗戰するのも遺憾になれば、いつそのこと是れより四國へ渡り、大に兵勢を整へて後日都

に入ることにしては如何……左衛門佐もさは思はずや』

と宣はれた、左衛門佐重盛、

『父上には又しても笑しなことを仰せらるゝものかな、機會は失ふべからずである。今にして伐たずば、彼れは我に先ぜん、無勢にて負けるのは兵家の常である、何の恥る所があるべきや、今日の事は無勢たりとも速かに駈け付けて叶はずば、即時に討死致してこそ後代の名聲も揚るものなれ』

と仰せられ、傍に居つた筑後守家貞を顧み、

『喃家貞にも左樣は思はずや』

と尋ねられたが、家貞は容姿を更め、

『左衛門佐殿の仰せらるゝ所に筑後も同意で御座る。六波羅なる御一門の所にも定めて覺束なく御心配遊ばしめさるゝことであらうと思ふ、急がせ給へよ』

と云へば、清盛も勇ましく、

『よし吾が志は決した。いざさらば是れより歸らう』とて、大將清盛以下皆淨衣の上に鎧を着、熊野權現の方に向ひて一齊に禮拜し、

『今度の合戰必ず討ち勝たせ給へ』

と祈請を畢へ、引返し馳せて歸京の途に就かれたが、和泉と紀伊との國境なる鬼の中山（今は山中と稱す）まで歸り來たられたとき、向ひの方より壹人の騎兵の蘆毛の駒に鞭うつて此方に馳せ來るのに出遭ひた。衆

望み見て。

『オヤ惡源太が使か』

と色を失ふものもあつたが、是れは源氏の使者にはあらずして、又六波羅よりの使者であつた。清盛は使者を呼んで、

『六波羅今は如何にや』

と尋ねられた。使者、

『我れの出立までは何等變りたる事も之なく候ひし』

と答えて、更に言葉を續けて

『播磨中將成憲朝臣助命を憑みて六波羅へ御出であつた處、內裏より宣旨とし引續きに召されたれば、力及ばず引き渡したるに、檢非違使尉

坂上兼成殿受取つて伴ひ歸られ候ふ』

と語つたが、この成憲朝臣と云へるは少納言入道の二男で、大貳清盛の婿であつたが。左衛門佐重盛は之を聞いて、

『さてもいひ甲斐もなき事をしたものかな、折角當家に憑み付いて來たられたる者を敵の手に渡すと云ふ事があるべき？。かくては御方に勢力が附くべきや』

とて大に怒りの顏色に顯はれたが、忽ちにして又その顏色を柔らげ、更に使者に向つて。

『惡源太が安部野に待つとの評判があるが、これは如何にや眞實か』

と尋ねられた。使者

『其の儀はなし。伊勢の國の伊藤が率ゐる兵三百餘人が大宰大貳が兇黨征討の爲めに都へ入らせ給へば御供を仕るとて安部野に待つて居るのを見て候ふ』

と答えた。重盛

『さては敵の惡源太にてはなし、我が味方の兵か、急げや急げ』

と我れ先きにと進み遂に伊藤の兵と合し、益々勢いを得て進む程に和泉の國の大鳥の宮の前まで馳せ着いたが、左衛門佐は則ち勝戰を此の神廟に祈り。『飛』と云ふ鹿毛の駒に白覆輪の鞍を置き、之を神馬とし奉納せられた。大宰大貳清盛は之を見て。

かひこぞよ反りはてなば飛びかけり

と云へる一首の三十一文字の和歌を詠みて添へられ、清盛等の一行は愈々京師を指して馳せ向ふた。

はぐゝみ立てよ大鳥のかみ

（廿六）清盛の一行京師に入る＝名簿を信頼に送りて詐りて他意なきを示す＝上皇は御室仁和寺へ、主上は六波羅へ潛幸せらる

太宰大貳清盛等の一行は既にして京師に歸つた。而もそれが武裝である。熊野の僧兵や湯淺の卒伊勢の伊藤氏の勇士も加はつて都合四百餘人の精兵が入洛したのである。信頼卿は今にも六波羅より攻め寄することもあるであらうとて、日を夜に繼ぎ軍備をさゝ怠りなく、又六波羅の平氏の邸にても同じく義朝等が今日にも押し寄せ來ることもあらうかと

て是れも亦守備の用意畫夜怠りなかつた。而して十餘日を經ても何れの方からも敢へて攻め寄せずして機會の乘ずべきを觀望して居るのみであつた。其の中に平家は主上及び後白河上皇の兩陛下を迎え奉らうとの手段を廻らして居つた、のみならず清盛は主上及び上皇の駕を我れに枉げさせ給ふまでは如何にもして戰鬪を避けやうとの冀望を懷いた。それ故に清盛は使者を以て名簿を信賴卿の所へ送らせ、且つ詐つて

『清盛は卿に對しては別に何等の怨みをも結び居れる所もなければ、隔意の御座らう筈もない。今や卿の德は四海に溢れ、威は天下に充つ、清盛の如き總べて卿の庇蔭に依らざるを得ぬ、故に名簿を茲に閣下に呈して其の他心なきことを表白する』

と申し送らしめ、尙ほ更に

『清盛が今回武裝して歸洛したのを以て卿は卿に對する意味のあるげに思はれ給ふやに承る。されども清盛は決してさやうの心あるに非ず只近日頻りに清盛が耳にする風說は、世に清盛の家に對し怨恨を懷ける輩があつて、恒に卿に讒言して我が家を陷れやうと圖りつゝあるとのこと。されば萬一のときを慮りて、我が身の敵を防ぎ避けやうが爲めなれば安堵ありたし』

と云ひ入れしめた。信賴卿は

『げにも……』

とあつて、其の後は清盛に對する警戒は大に減ぜさせられたのである。

平治元年も漸く歳末に迫つて僅に數日を殘す十二月の廿六日と云ふ日の夜になつたが、夜更けて烏羽玉の咫尺も知れぬ暗夜を冒して、竊かに上皇の御所に充てられたる一品御書所に參りて、忍びやかに拜謁を申し入れたものがあつた。それは別人にあらず藏人右少辨成頼朝臣であつたが後白河上皇も起き出で對面あつて、

『夜中の用事何事の出來せしや』

との御下問であつた。

『特別に何事と云ふには候はねども世の中は今夜の夜が明けぬ前に騷動起りて、又亂れを見るべし、經宗惟方より申し入れし旨は候はずや。主上には既に黒戸を遁れ出で何方にか行幸あらせられ給ふた。陛下にも急ぎいづ方へか成らせ給へ』

と奏したので、上皇は驚かせ給ひ。

『されば朕はまづ仁和寺へ……』

とあつて。殿上人が外出の姿に替へさせられ、一品御書所から逃げさせ給ふたが、成頼朝臣には豫ねて御馬に鞍を置き、上西門の前まで牽き來たり居たので、上皇には之に乘らせ給ふと、成頼朝臣は

『おぬかせ申し候ふことなれば、我れが御供申し上ぐるも却つて惡しかるべければ、臣は是れより御別れ申し侍る』

と奏して、何れへか立ち去つた。

上皇には供奉する卿相雲客一人もなく、只御一人のみ御馬の足に任せ

て御幸になつたが、未だ夜半の事なれば廿六夜の月は未だ出でず、比叡山の山颪の音冴えて空かき曇り、雪はちら〳〵と降りしきり、東西南北の方角も見分けつかぬ道に、草木の風に戰くを聞し召しては逆徒の追ひ來りたるにはあらずやと、御膽をも消えさす思をなさせ給ひつゝやうやうにして御室に潛幸を卒へさせ給ふた。

是より先き四年保元元年の亂に當りこのところは新院（崇德上皇）が味方の軍敗れて御隱れ所となつたことがあるが、其のときには家弘、光弘以下供奉して御供をなし、暫し御一緒にて苦しき中にも又樂しませ給はすべき事も出來たが、今上皇には武士の一人も從ひ居ねば、御心細さは此の上もなく、今昔の情に堪へ給はずして。

歎きにはいかなる花の咲くやらん。
みになりてこそ思ひ知らるれ

と詠じさせ給ふて、其の胸の裡の辛らきを述べさせ給ふた。主上には上皇が一品の御書所を忍び出でさせ給ふたよりは僅少時以前であつたが、黑戸の御所を忍び出で、內裏の北手なる縫殿の陣の所にて御鬘を蒙らせ女の姿となつて、中宮と一つ御車に乘らせられ、檢非違使別當惟方。新大納言經宗の兩人直垂に柏挾して供奉し奉り、藻壁門から逃れ出でさせ給ふた、其の御門の守衛は金子家忠と平山季重とが勤めて居つたが、家重之を呼び留めて。

『誰れなる人の御車なるか、是れへ立てさせよ』

と云つた。惟方顧みて。

『上臈女官だちの出でさせらるゝのちや、惟方が居れば別に仔細はあるまいよ』

と答えられたが、家忠承知せず

『檢め見て遣はさう』

と云つて、弓の端にて御車の簾を搔き揚げ、松明を振り入れて見奉りしが、時に主上御年十七歳にして元來龍顏美貌におはしませば、女裝せられて一入に美しく、目眩ふばかりの美姫に見へさせたる上に中宮にもおはしましたれば、定めて女官の外出にてあるべしとなして、別に更に咎めもせず拔し出でさせ參らせた。

主上及び上皇をぬかし參らせ之をお迎へ奉らうとのことは、清盛の冀望で竊に惟方。經宗等と謀り合せ居たことなれば、清盛の郎等伊藤武者所景綱と館太郎貞康とが進み入り御車を舁き奉り。門を出づるや土御門を飛ぶが如くに東の洞院の方へ行幸せさせ給ふ。東の洞院には左衛門佐重盛。三河守頼盛。常陸介經盛の三名が騎兵三百を率ゐて待ち受けて居つたが、御車の前後を守護して六波羅の清盛の邸に入れ奉つた、玉體事なく行幸成りたれば平家の人々は案の外のことにて悅こぶこと此の上なく。軈て藏人右少辨成頼を以て六波羅を皇后とする旨の勅命あり。朝敵にならぬと思へる輩は急ぎ馳せ參られよとの公示が出た。

關白大殿基實。太政大臣中御門宗輔。左大臣大宮伊通。內大臣藤原公

敎以下公卿殿上人我れも〳〵と參集した。又內裏へと志して馳せ集る兵隊ども等も六波羅を禁裏に定められたと聞いて、我れ先きにと爭ふて六波羅に參集したれば、淸盛の六波羅の邸の門前は馬や車の立て所もなく其の中に目立ちたる甲冑裝束の兵士相交りて雲霞の如く河原表までに達し、立錐の餘地だもなきまでに充滿した。

（廿七）右衛門督信賴主上上皇の潛幸を知らず＝惟方朝臣を人呼んで媒介小別當と云ふ＝義朝、義平味方の者を記簿す

驕るものは久しからず春の夜の夢の如しと云へることがあるが、右衛門督信賴卿は三條御殿を燒き、主上上皇を幽閉し奉り。親から大臣大將となつて庶政を己れが心の儘になすに至つては、驕奢を恣にし美酒佳

殽每日遊宴に耽り、醉ふては美人の膝を枕にして睡眠し、主上上皇の逃れ出でさせ給ふたことの如きは夢にも知らずして居つた、其の翌朝の曉に至り越後中將藤原成親朝臣が信賴卿の寢室に馳せ來りて、至急會見を求め、顏色を替へ、靑うなつて

『いかに御邊は便々として、かくはなしおはするぞや、主上上皇は最早此の內裏にはおはしまさず、他の所へ御行幸に相成つた、今は卿相雲客一人も居ず、ア、悼ましや御運の盡きかと覺ゆる』

と云つて之を告げたれども、信賴卿は尙ほ泰然で

『よもやそんなことはなからう。我れは經宗惟方に堅く含め置きたから……』

と答えられた。成親朝臣

『サア其の主上等の御潛幸は經宗ども等の計ひと承はれる』

と申されたが、信頼卿は尙ほも之を信ぜられずして、

『何うしても左樣はない筈、かくては大變ぢや』

とて、馳せて一品御書所に參つて御覽ぜられた處、上皇には居給はぬので。

『慥に曉方までは、こゝにおはしたる筈のものなるに、不思議ぢや』

と仰せられて、所々探索せられても愈々居給はなかつた。されば黑戸の御所をとて、又之へ參られたが主上もおはしまさぬので、信頼卿には今更の如く驚かせられたるが、自分の寢室へ馳せ歸へり、猶ほ其の處に居

たる越後中將の耳に口寄せ。

『この事は誰れにも話し知せては吳れな、世に披露しては不可よ』

とさゝやかれたるこそ、實に憫然なる次第であつた。惟方も經宗も別に尋ねらるゝこともなくして。

『アヽ、拔り居つた。はかられた。殘念至極』

と、太りきつたる大きな男の信頼卿は跳り上り跳り上りして憤られたが唯其の板敷の響く音のみして、別に何等の詮もなかつたのである。

主上を落とさせ奉りたるに與つて最も力あつた。惟方經宗の內、惟方の如きは元來信頼卿とは幼少からの親友の間柄にてもあり、平常殊に交際親密にあつたので、信頼卿が今回の企に付いては、深く契約し居られ

た所もあつたのであるけれども、舍兄左衛門督が嘗つて會議の退出のときに懇々誡め敎えられた言葉の全く肝膽に染み渡つてかくは主上を盜み出し奉ることをなしたのである。

惟方は初め信賴卿に與みして上皇及び主上を押し籠め奉るの媒助をなしたものである。夫が今は又之を盜み出し、押し籠めの所から逃げさせ奉る事の媒助したれば、彼れは官檢非違使別當にして身體が矮小なりし所から時の人評して之を媒介小別當と呼んだと云ふことである。

惟方經宗等が相謀つて主上上皇をぬかし奉つたときに惡源太源義平は偶々加茂の神祠に參詣して歸途でこの事を聞き、急ぎ馳せ歸り、父播磨守義朝へ向つて。

『我れ今日加茂の神祠に參詣いたし、歸途にて承れば、主上は六波羅へ又上皇は仁和寺へ御潛幸相成つたとの由なるが、こは如何にや、眞實なるのであらうか父上には委細の樣子御承知であらう』

と尋ねた、義朝

『サア其の事ぢやが、我れも只今此の由を聞いた處なるが、右衛門督の方からは未だ何とも告げ知らせず、されど一たび契り約束したることは違變せぬが我が源家の家風なれば、主上。上皇がたとひ他へ行幸あらせられたとて、一旦信賴卿と契約せしものからは、何とて變心すべきや、いな今となつては變心も致されまい。就ては兎に角この內裏に立て籠れる軍勢が何程居るか、記しあげて見ることにせう、

とて記簿に錄せられたが左の如くであつた。

大臣大將右衛門督信頼。其の子息新侍從信親。兵部權太輔基家。民部權少輔基通。尾張少將信俊。中納言源師仲。越後中將成親。治部卿兼通。伊豫前司信員。壹岐守貞知。但馬守有房。兵庫頭頼政。出雲前司光保。伊賀守光基。河内守季實及び其の子息左衞門尉季盛中宮大夫進朝長。右兵衛佐頼朝。陸奥の六郎義隆。新宮十郎義盛。佐渡式部大輔重成。平賀四郎義信。鎌田次郎正家。佐々木源三秀義。熱田大宮司太郎範忠。重原兵衞。波多次郎義通。平荒次郎義澄。須藤刑部丞俊通及び其の子瀧口俊綱。齋藤別當實盛岡部六彌太忠澄。猪俣小平六範綱。熊谷次郎直實。平山武者所季重

金子十郎家忠。足立右馬允遠元。介野八郎弘常。關二郎時員。大胡太郎。片桐小八郎太夫景重。木曾中太。常盤井次郎。井澤四郎信景播磨守義朝。惡源太義平外に源家の養兵二百人、應募軍兵步騎諸兵總計約二千人

義朝は義平と共に急に信頼卿に會見を求めて、主上、上皇共に他へ行幸されたことを聞き糺した處、信頼卿はわざと平然と構えて

『決して決して、いまに禁内におはします』

と答えられた。義朝、義平口を揃えて重ねて

『如何に宣ふとも、慥に他へ行幸になつて居ることを承りた。閣下には御隱し遊ばすとも既に存じて居る』

信頼卿

『それでは仕方がない、實に味方の軍氣を沮むの虞れがあるからとて、成親とも相談して其の事は秘して居つた次第ぢや』

義朝

『それならばそれで宜しいとして既往は御尤め申し奉りはせざれども、主上も最早や六波羅へ行幸相成りたれば、我れ等は便々と猶豫は致されまい、敵も何れ爰に志氣を得たれば早速に攻め寄せるに相違なからう、味方は今後に時日を移さば全く瓦解を見ることになる。何分早く雌雄を決し、勝つて主上上皇の御還幸を願ひ奉るやうにすることが肝要の至りであらう、左は思し召し給はずや』

と仰せられた、信頼卿

『今後合戰のこと卿方に何分宜しく頼み入る。

（廿八）六波羅皇居の御前會議清盛へ兇賊征討の詔勅あり＝重盛、頼盛、教盛諸軍を率ゐて征討に向ふ＝信頼怯懦驕慢に苦む

六波羅の皇居にては兇賊信頼征討の御前會議を開かれたが、其の結果として二條天皇には清盛を召された。

太宰大貳平清盛は急ぎ參内したるに、頭中將實國を以て、詔を傳へしめ

『朕今汝に進んで賊を討つのことを命ず。王事鹽きことなくして、堅く破れずと云へば、逆臣の滅ぶるは素より疑ひなし。されど宮城は新に

なる所、もし燒けなば朝家の大事たるべし。汝將士をして詐り走らしめ弱を示さしめせよ、賊必ず衆を罄して出で鬪はん。因つて速に入つて之に據れ、重ねて諭す宮城をして兵火に罹かしむること勿れ。朕特に注意に及ぶ』

と宣はせられた、清盛畏まつて詔勅を拜し。

『朝敵たる兇徒の誅戮は天威を假つて之を行へば、臣が掌握に在ることに候ふ、たゞし合戰は時刻を移すべからず。されば急速にするとせば自然狼藉の出來仕り候はんか、失火なき樣にとのこと誠に困難なる御勅諚に候ふ、されども聖旨に依りて力を盡し候ふ樣仕つるべく候はん』

と奏して退出せられた。愈々夫より即時に信頼等の兇賊征討軍の出動に及ばれたが、太宰大貳清盛は主上六波羅におはしますことなれば、殘りて皇居守衛の任に當り、征討軍として大内に向ひたる人々は、左衛門佐重盛を總司令官とし、三河守頼盛、淡路守敎盛の兩名を各一方の司令官に任じ、此等三名の指揮の下に筑後守家貞及び左衛門尉家長、主馬判官盛國、其の子右衛門尉盛俊、與三左衛門尉景安、新藤左衛門家泰、難波次郎經房、妹尾太郎兼康、伊藤武者所景綱、館太郎貞康、同太郎貞景等を部將とし、步騎總兵員三千餘人と共に六波羅を出發せしめ、賀茂河を渡り、西の河原に陣を敷いた。

左衛門佐平重盛は今や年齡二十三なれども清盛の嫡子たるを以て、

今日出動せる軍の總司令官とならられたることなるが、赤地なる錦にて製したる直垂を着、櫨匂ひの鎧にて、龍頭の兜を冠し、小烏の太刀を佩び、鷲の羽の白黒切れ分れたる紋の羽を附けて作つた矢を負ひ、滋藤の弓を執りて、黄桃花毛の馬に柳櫻を摺りたる貝鞍を置きて乘られたが出陣に臨みて、麾下の軍隊に左の如く令せられた。

『諸君勗めよ、今回の合戰勝を得ることは必定であるぞ、年號は平治にして、土地は平安城なるに、我が味方は平氏の軍勢ではないか、三つ共相應じて居る、敵を平げて捷戰を見ることは疑ひやあるべき、誰れか昔しの所謂る樊噲の勇氣を出だして進まざるものぞ、進めや進め、進んで勳功を立てよ』

と、依つて三千餘人の軍勢を三分して、其の中の一分に自から大將となり、他の二分は賴盛と、敎盛とに分けて引率せしめ皇城の東面なる外廓の三大門即ち陽明、待賢、郁芳の三門から攻め込んだ。

兇徒は大内に據りて南西北なる三方の門を鎖して固め、唯東の一面の門のみを開いて待つて居つた。無論承明、建禮の兩門はあけて居つたのであるが、其の傍に在る長樂、永安等の諸小門も開いて大庭の裡には戎馬に鞍を置きて多く引き立て、梅壺、桐壺、雛壺及び紫震殿の前後、登花殿の脇の壺まで防禦の兵士隙間もなく充滿し、白旗二十餘旒を押樹て、寒風に飜えさせて居つた。

既にして六波羅より出發したる官軍の諸兵が紅旗三十旒を押立て、機

會を見圖つて三軍一度に鬨の聲を擧げ齊しく猛烈に攻め寄せた處、只今までは赤地錦の直垂に、紫裾濃の鎧の着け、白星の兜に鍬形打つたる猪頸を着なして黄金作りの太刀を佩ぎ、床几に腰打ちかけて、勇ましさうに防禦施設の指揮をなして居られた大臣大將信頼卿、忽ち顔色變りて葉の葉の如く五體顫ひて、南階の磴段を下るに將に仆れやうとせられて降りかねられた。漸くにして降りて、馬に乘らうとして引寄せられたがこの馬は主の臆病には似もせずして、氣の進み勇めるものにて、信頼卿が乘らうせらるれば、馬はツト驅け出でやうとあせりはやるので、馬の口取り七八人も集ひ寄つて以て馬の胴を抱えなどして、侍士二人又信頼卿の後より寄つて、

『早く乘り遊ばせ』

と云つて尻を押し揚げた處、餘り押し過ぎたので、馬の背を打ち越えて向ひの地上へ伏しさまに落ちられた。侍士は廻わり行き急ぎ扶けて引き起し參らせて見れば、顔一面土沙塗れて、鼻血さへ流れ見苦しかつた。義朝此の體を觀て、日頃大將として恐れ崇め居つたに似もやらず、忽ち睨み付けて

『この信頼と云ふ。ふつゝかな馬鹿者臆したな』と云ひ捨て春興殿と宜陽殿との間なる日華門から出で、走つて椒芳門に向つたが、信頼卿も鼻血を押し拭ひ、漸くにして馬に乘られて、待賢門に押寄する敵を防ぐとて、之に向つて往かれたが、襲ひ來る敵を前に引き受けて。陣頭に立つ

て諸兵を指揮して勝利を得ることの出來やうものとも見えなかつた。待賢門に寄せたる官軍は總司令官たる左衛門佐重盛公で、公は其の率ゐる兵歩騎合して一千餘人なるのを又折半して、其の一半は大宮表へ陣を取り之に留め置き後繼の援兵に當て、其の一半を率ゐ自から指揮して攻め寄せられつゝあるのであつたが、信頼卿はこの敵に遇ふて何うせられたであらう？。

（二九）重盛大内に攻め入る＝信頼怖れて馬より落つ＝義朝、義平をして之を防がしむ＝義平等十七騎重盛の衆兵と戰ふ

左衛門佐平重盛公は右衛門督藤原信頼卿が指揮して兵を勵まして防禦に努めて居らるゝを見て。

『此の門の大將軍は信頼卿と見奉るは違ふか。かく申すは桓武天皇の苗裔、太宰大貳清盛が嫡子左衛門佐重盛生年二十三。このたび勅命を奉じて爰に向つた』

と名乘りかけられたが。信頼卿には怖れて馬から落ち何等返事にも及ばず。

『それ防げよ侍士ども』

とのみ云つて引退かれた。勇將の下には弱卒なしと云ふことがあるが。是れが眞實であると共に、大將の先づ退くやうの防禦軍の能く敵を防いで身命を惜まぬ侍士は一人もないので我れ先にと逃げるので。重盛は

『敵はひき逃ぐるぞ烈しく攻めて通がすな』

とて勇み進みて紫震殿の前なる廣庭の椋の木の所まで攻め付けられた。

賊軍の參謀播磨守義朝之を見て。

『惡源太は居らぬか、信頼といふ大臆病人がために待賢門ははや破られたるぞ、あの這入つた敵を追ひ出せ』

と仰せられたれば、惡源太義平

『ハッ委細承知……父上さらば追ひまくり、打ち退けることに致さう』

とて、待賢門の方に駈けつけられた。之に續いて行つた處の從兵は

鎌田正家。後藤兵衛。佐々木源三。
波多次郎。三浦荒次郎。須藤俊道。
齋藤實盛。岡部六彌太。猪俣小平太。

熊谷直實。平山季重。金子家忠。
足立右馬允。上總介八郎。關次郎。
片岡小八郎太夫。

にして以上義平共に總勢十七人であつたが。孰れも騎馬なれば。轡を並べて馳せ向ふた。義平は

『此の寄せ手の大將は左衛門佐殿と承る。斯く申すは清和天皇九代の後胤左馬頭源義朝が嫡子。鎌倉の惡源太と申す者。生年十五歲にて武藏の大倉谷の軍のときに大將となつて、叔父の帶刀義賢を討つてより以來。度々の合戰に臨んで一度もふつゝかなる名を取りたることなきもの年積つて今や十九歲なるこの身見參に及ぶ、左衛門佐殿は平氏

の嫡子。我れは源氏の嫡子共によきあいかたである。いでや勝負に及ばん』

と大音聲にて呼んで出でられた、左衞門佐重盛。勇める馬の足を踏み留め。

『心得たり。承知した』

と、これより敵味方入り混りて、大に戰ふたが、惡源太義平は親から鬪ひつゝ、

『木の葉武者に目をかけな。大將を組んで擊て。櫨の匂ひの鎧に、蝶の裾金物をうつて、黄桃花毛の馬に乘つたのが此の手の大將の重盛であるぞ。押し並んで一齊に進んで生擒に致せ』

と下知しつゝ、猛虎の如く逸りたけつて重盛に目かけ進める程に、義平の軍勢は僅に十七騎なれども、選びに選んだ生命を惜まぬ勇士なるのみで、步騎五百餘人の大勢の中を荒れ廻り、奮鬪したれば、流石の重盛の軍勢も避易して退く。

『平家の軍勢は逃ぐるぞ、退くぞ、左衞門佐を逃がすな』

と義平等は重盛に迫つたが、重盛が麾下の士與三左衞門景安。新藤左衞門家泰以下百餘人が間を遮り戰ふたけれども、義平等十七騎は此れ等のものには應戰もせず、打ち捨て大將重盛に目を注ぎ、大庭の椋の樹を中に立て、左近の櫻、右近の橘の樹の周圍を七八回も追ひ廻はつて組み合ひをせやうとした。

重盛の兵遂に叶はぬと思つたのであらうか、一齊に大宮表にある別軍の陣を指して退いた。

この時左衛門佐重盛公には大宮表の陣頭で弓杖をついて、馬の息を繼がせられて居られたるに、筑後守平家貞見て。

『曩祖平將軍貞盛公の再生か』と云つて、稱讃し奉つたと云ふことである

それより重盛には又更に以前の兵と繰り替えて、あらての精兵を率ゐて以前の大庭へ攻め寄せられた。又惡源太防禦せやうとて駈け向ひ、見廻はして

『今度の寄手見る處新手なれども大將は元の重盛ぞ。以前は漏したりと

もこのたびは必ず遁がすな。』

と下知すれば、勇みに勇みたる義平麾下の十六士。口を揃へて、

『然り大將の下知を待つまでもない、我々心得たり』

とて、先を競ふて進んだ。又難波次郎經遠。其の弟同じく三郎經房及び妹尾太郎兼康。伊藤武者景綱等の勇士を始めとして。中に隔てゝ奮戰したるが、復始めの如くに椋の樹の周圍、櫻。橘の樹の傍を互に追ひ廻つた、義平は弓を小脇に挾み、鎧踏ん張り、馬上に立ち揚らんとして、左右の手を擧げ。

『我れは源氏の嫡子なるぞ。敵には誰をも嫌ふべき、寄れや組まん』

と進んで迫られたが、重盛の兵は又もや退いて大宮表を指して引いて出

づ、惡源太義平には二度まで大勢の勁敵を追ひまくり。弓杖をついて馬の息を繼がせて居られたる處。左馬頭義朝之を見て、瀧口俊綱を以て命を義平に傳へしめて。

『汝が充分に防がねばこそ、かくは敵に度々駈け入らる。彼れ速に追ひまくれ』

と云ひ遣らしめた。惡源太

『承知致したと父へ復命せよ』

とて。十六士に向ひ

『サア進めや者ども、追えや敵を……追ひ詰めて、烈しく討て』

とて又もや義平等十七騎は大宮表に驅け出でゝ。外目もせずに、平家の

大勢の中に割つて入つた。

さなきだに重盛の兵は今は引き退きつゝあつたところなれば。馬の足を留めて防ぎ戰ふこともなし得ず、大宮を下りに二條を東へ向つて駈けのびたれば、義朝は義平の働きを覽ぜらて。

『我が子ながらも今はやつたぞ。義平は能く敵を駈け散らしたるかな。ア、克くも敵を駈け散らした』とぞ譽められた。

(三〇)重盛衆にかけ離れて逃ぐ＝義平正家と共に之を追ふ＝義平の馬驚き仆る正家重盛を射る重盛脫歸＝賴盛其他官軍皆逃げ歸る

重盛は與三左衞門景安及び新藤左衞門家泰と共に、主徒三騎のみ味方の他の兵と離れて、二條を東へ引き退き居らるゝ所を、惡源太義平は鎌

田次郎正家に目にて之が重盛であることを告げ知らせつゝ。其の後より大聲にて

『爰に落ち延び行くのは、平家方の大將重盛殿と見受け申す。馬引き返へして勝負あれよ。返せ、返させ給へ』

と喚びつゝ追ひ行きたるが。重盛等は何の答えもなくして猶ほ逃げて居つた。義平等は

『逃がしはやらぬ』

と追ひ詰めたるに、既に堀河の所まで行きつくと、道の左側に村木の積み置きたのがあつたが、義平の乘られたる馬は、かねて片寄る僻のある駒で、其の材木に驚いたのであらう。右手の方に跳り飛んで、小膝を折りてトツと伏したので、義平には馬を立たせるまで追つ懸け行かれぬので、鎌田正家義平に代りて、進み

『ナニ重盛落ち延ばさしてたまるものか』

と、二度續けさまに之を弓射つたが、初めの矢は肩に中り、後の矢は背に中つたけれども、鎧堅うして矢はたゝずして後返りした。惡源太

『あれは世に聞えし有名なる平家重寶の唐革と云ふ甲なれば、容易に射貫き難し。馬を射れ、馬を射つて重盛が馬より落つる所を擊ち取れ』

と下知せられた、正家は其の下知に從つて、馬を射つたが、馬に中つて矢は馬に深く立ち込んで、馬は忽ち仆れる重盛は路傍の材木の上に跳ね落され。冑も落ちた。正家は急ぎ堀河を越え渡つて重盛に近づき組うと

したが、重盛には正家と組んでは到底叶はぬと思はれたので、寄り來る正家の兜の鉢を弓の端で以て突かれた。正家は重盛に冑をつかれてヒヨロ〳〵と後に寄つた間に重盛に落ちた冑を被つて緒も締められた。其の時與三左衞門景安駈け寄つて、正家と重盛との間に入り隔てて。

『昔し漢の紀信は高祖が滎陽に圍みに遇ふて危きに臨んで、高祖に代つて命を捨てたと聞く。主辱しめられれば、臣死すと云ふこともある。景安爰に在り、寄れや組まん』

と云ひつゝ正家に引き組んで取つて押へたる時に、惡源太も亦漸くにして馬を引き起し、是れも堀河を越え渡つて行き、重盛に組まうと思つたのであるが、正家は今引き組んで押へられて居る、重盛へは又寄せ合ふこともあらう正家を今擊たせては叶はぬとて、與三左衞門の首を斬られた。重盛は之を見て引返して、憑みに憑み居つたる景安を擊せ生きて何かせんとて、惡源太と組まうとしたる所へ、新藤左衞門が家泰馳せ來たつて。

『爰は大將の命を捨てさせ給ふべき所に非ず。家泰の居ない所こそは、御勝手にしめされ』

と云ひて、我が馬を牽き向け。

『左衞門佐殿にはこれへ乘らせ給へ』

とて重盛を其の馬に乘らしめながら、自分が進んで正家と重盛との間に入つて隔て、惡源太に組んだ、正家は重盛に組まうと思つたが、又主を

撃せては叶はぬと思つたので、新藤左衛門の上に落ち重なつて、其の首を取つた。此の間に重盛には漸くにして辛うじて六波羅へ引き還られた

是より先き三河守頼盛は郁芳門に向つて攻め寄せたが、此の門は左馬頭義朝自から防禦守衛の任に當つて居つた。義朝は頼盛の襲ひ來るに會して、自から名のつて陣頭に顯はれ出で、從兵を指揮し

『惡源太は二度まで敵を追ひ出だしたぞ。進めや者ども』

と宣ひて下知さるれば、中宮太夫進朝長、右兵衞佐源頼朝、新宮十郎義盛、平賀四郎義信、佐渡式部太輔重成等を始めとし、我れ先きにと、先を爭ふて、敵陣に向つて駈けつけた。

右兵衞佐頼朝は後ちに平家を滅ばして、六十六國の總追捕使となり、

我が國に幕府政治をなしたる開祖となつた智勇兼備の豪傑であるが、この時年齡十有三歲であつたが、名のつて出で敵の騎兵二人を射つて一人は落命せしめ、一人には負傷せしめた、左馬頭

『汝等の戰ひは口には立派に云へども、何となく透間があつて手ぬるく見ゆる、義朝手本を示さん』

とて、眞先に進まれた。義朝の從兵は之を見て

『大將を先きに進ませて後れを取つてなるものか。負けな進め』

と、何れも一人當千の勇士が義朝朝臣を中に前後左右より圍みて、鬨の聲を擧げて頼盛の軍勢を邀へ撃つた、頼盛も爰に至つて攻勢を取ることを止めて、防禦に轉じたが、士卒を指揮し、勵まして暫らくは支へて居

つたものゝ、遂には引き退くに至つた。

義朝は賴盛が兵の退くに乘じ。

麾下に令し。

『賴盛の兵は敗るゝぞ、烈しく攻めて悉く首を取れ』

とて、猛烈に追はれたが、賴盛は急ぎ兵を收めて是れ亦大宮表を指して退いた。時に敎盛は陽明門に向つて居つたが、是れも暫らくは攻勢を取つたが、到底其の目的を達し得ざるものゝ如く、防禦に轉じ。遂には引き退いた。

禁裏の諸門を守つて居つた、軍兵等は、平氏の攻擊軍が當初の攻擊の烈しきに拘はらず。如何にももろくその破れることの早くして。不思議に云ひ合はせたやうに、逃げ走るのには何か仔細があるのではないかと思はぬのでもなかつた。しかし勅命に依つて自分等を誘ひ出さうとするの謀であらうとは夢にも知らぬので。

『平家の弱蟲。悉く揉み殺せ』

と。義朝を始め、大內に據つて守つて居つた源氏の兵士等は悉皆逃ぐる平家の軍兵を追ふて出で、自己が據つて居つた大內の裡の陣中には戰鬪力のある兵は一人も居ないことになつた、其の結果は愈々何うなつたであらうか?。

鎌田正家の配下に屬したる步卒の中に八町次郎とて力强く又走ること

が非常に早いものがあつた。三河守賴盛が郁芳門の攻擊を止めて退き走

り居られるを見て、八町次郎は熊手を以て追ひ行き、頼盛が有名の駿馬に兩鐙を合はせて駈け逃げるに少しも劣らずして。追ひ附きて頼盛の兜の頂邊に其の熊手を打ち掛け打ち掛け續けて走りたるが、頼盛も頭を左右前後に傾け、それを脱して居られたるに、終には打ち掛て、八町次郎

『えいや』

と聲かけて引いた。頼盛引き落されるかと思ひの外に、乍ち佩びさせた る所の太刀を引き拔いて、熊手の柄を切つたので、八町次郎は仰向けに後に仆れ轉びた、傍で見た人々

『掛けるものも克く掛けたが、切るものも克く切つたものだ』

と評して感じたと云ふことである。頼盛は兜に熊手の切りた一方が掛つ

たのを掛けたまゝ、それを取り棄てもせず、顧みることもなく、三條を東の方へ、高倉を下り、五條を東へ重盛とは少し後れて六波羅へ歸られた。其の頼盛が熊手を切られたる太刀は刑部卿平忠盛朝臣が池殿に午睡中に池から大蛇が上り來つて、忠盛に向つて走り寄らうとするので。此の太刀を枕頭に立てられたれば自然にするりと拔けて蛇に掛りたれば其の蛇恐れ池に沈み、太刀も亦鞘に納まつたとの不思議を史上に傳へた有名の拔丸と云ふ太刀であつたと云ふことである。

（三一）官軍の退走は謀計なり＝信頼の元氣喪失＝義朝進んで六波羅に向ふ＝信頼逃る＝清盛賊軍の鬨聲に驚いて胄の前方を後に着る＝頼政の貳心義平攻む＝俊通戰死す

大將重盛を始め、頼盛、敦盛以下官軍は一旦攻擊の勢を示して押し

寄せ又兵を引揚げて六波羅へ退ひたのは、賊勢の強うして敵し難きのではないので是れ所謂る強うして弱きを示し。敵兵を或る位置にまで誘ひ出すの謀であつたのである。それを義朝等信頼に、味方したる將校中に思はずして、自己の陣を空虛となして、追究したのは全く官軍の計策に陷つたので、官軍の目的は十の七八分は達せられたのである。官軍の勝利は最早や見えたことになつたのである。

右衛門督信頼は彼我兩軍の衝突を見た初めに重盛のために待賢門の防禦を破ふれてからは元氣全く失せて。軍をする事は思ひもよらず、戰鬪へは向う樣にもせられず。隙を求めて遁れ逃げやうとのみして居られた義朝が官軍の逃げ行くのを追ふて駈け出でたる後は、大内に忍び居ることもなし能はずして、恐る〳〵味方の軍勢の後に附き從ふて河原までは行き居られたが、義朝が愈々進んで六波羅に攻め寄するの策を立てると信頼は六波羅へは向はずして、河原を上り遂に逃げ行かれた。義朝の小性金王丸是を見て、

『右衛門督殿は今逃亡せらると見受けられる。追つかけ連れ歸り參らせやう？』

と云へば、義朝

『モウ止しにせよ、あの樣の不束ものが味方にあつては却つて妨げぢや其の儘に捨て置け。其の儘に捨て置けよ』

と云ひ捨て、河原を下りに向つて六波羅に進擊せられた。茲に至つては

信頼は最早や遁れ去つて客啄することなく、勿論指圖をせう筈もなければ、其戰爭は全く義朝と清盛の合戰で、純然に源平兩氏の軍となつたのである。されど平軍は二條天皇の勅命を奉じ。二條天皇を奉戴して活動するものなれば其の官軍であることは素よりにて義朝が賊軍の地位に居れることは當初に變つことはないのである。

六波羅の官軍は賊軍の進み來るのを防ぐため五條橋を撤して其の河岸の手前の方へは楯を以て垣を造り。進路を遮ぎつて待つて居つたが、賊軍は其の楯垣の前まで押し寄せて鬨を作つた、その鬨の聲は天地を震撼するの概があつた。清盛は元來武將に似合はぬ小膽であつたものと見える。忽ち鯢波に驚いて

『ソレ賊軍が押し寄せた』

と云つて、甲冑を着けられたが、兜を取つて前の方を後に向けて着けられた。侍士どもは之を見て、

『御冑が後向きになつて居る』

と云つたれば、清盛心に思はるゝやう、敵に怖ぢ懼れ。狼狽したと見られるのも口惜しいと思つたのであらう。

『主上こゝにおはしませば、敵の方に向けば主上を後になし參らすることになるから。恐れ多き故にかくは前の方を後に向けて着たのぢや』

と宣ひた。されど重盛

『何と御仰せ相成るとも、父上の聽して見えさすることは疑ひなしだ。そ

は兎も角もいざ打ち立ちて敵に向はう、者ども續け……父上いざさらば』

と仰せられて、重盛は五百餘人を引き連れて義朝の陣を指して馳せ向はれた。

賊軍の部將兵庫頭源頼政は今配下の士卒三百餘人と共に、六條河原に陣を構えて居つたが、元來頼政は出陣の當初から心に兩端を懷いて居つた。殊に信頼卿も落ち延び、主上も六波羅に遷幸せさせ給ふてより以降は、益々我が味方の望み少なうなるので、機會もあらば官軍に投じやうとの擧動が稍々顯はれた。

惡源太義平は鎌田次郎正家を召して、頼政の陣を指して、之を正家に

見せしめ、

彼所の陣は兵庫頭の陣にはあらずや』

正家

『左樣頼政殿でせう』

と答へたが、義平は

『憎い心得かな、敵に往來都合よき所にかけ離れて陣を設けたる心底、全く我等が合戰に打負けたら、平家に與みしやうと時宜を計るものぞ』

と覺ゆる。あんな奴は其の儘に置けば、味方に傷を付ける、いざ蹴散らして葬つて仕舞つて遣らう』

と仰せられて、正家等五十餘人の騎兵を率ゐて兵庫頭の陣門に臨み、會

見を求めて云はるゝやう

『兵庫頭殿足下の今頃の擧動は我れの目の違ひかは存ぜねども如何にも不審に存ずる、思ふに足下は源氏勝ちたれば、一門のことなれば內裏に參るべく、平家勝たば主上おはせば六波羅に參りやうとて、敵、味方兩軍の勝負が何うなるであらうかと樣子を見居らるゝ者であらう。如何にや必定それに違ひはなからうが、凡そ武士は貳心あるを恥とする、殊に源氏の習はせは最もさることにて、こん者のが吾が一門にあるとせば、氏の恥辱ぢや、寄れや組んで勝負に及ばん』

と眞十文字に驅げ破つて戰ふた。日頃勇敢であると言ひ誇つて居つた賴政配下の渡邊黨も、弱味をつけこまれて馬の足も立てかね、組むもの一

人もなかつたが、唯獨り賴政の配下に下河邊藤三郎行吉と云ふ者があつたが、惡源太義平配下の士瀧口俊綱を射つた。其の矢俊綱の首に中つて、俊綱はどつと馬から落ちた。

俊綱の父須藤刑部丞俊通も同じく其の衆に加はつて居つたが、是を見て、

『矢一筋でそれ程に弱り果つるか、さても未練なる事かな。それでも武士か』

と勇まし勵まされたれば、俊綱は弓杖をついて、乘り直らうしたるところを、義平之を見られて

『俊綱は急所を射られて居るぞ、敵へ首を取らすな』

と下知された。其の聲に應じて、齋藤實盛が傍に居つたが、太刀を拔いて馳せ寄つた。俊綱

『足下は味方にてはないか』

實盛

『左樣味方にて實盛と云ふなれども、御大將の今の御仰せ聞き遊ばされずや、さしもの兵を敵へ首を取らすなとのことなる故に味方より取り申すので御座る』

と申せば、俊綱莞爾として

『宜しいわかつた、まだ年若き御大將にておはしませば是れまで御心づきあるべしとは思はなかつたが、かやうにも御情け深くあらせ給ふこ

とかな、其の情け深き御大將の仰せに任かせて死ぬる』

と云ひて、西に向つて手を合はせ、頸を延べると。實盛は俊綱の背後に廻つたが、其の首は直に前に落ちた。其の父刑部丞俊通是を見て

『我れが一命を輕んじて軍をするのも、俊綱を世に存らへさせて面目をあらせやうが爲である、俊綱を擊たれては生きて居つても何の面白き事のあるべきや、討死して親子諸共に三途の川を渡らんもの』

とて、敵陣に向つて獨り駈け進まうした。義平

『誰れか刑部を留めよ、妄に逸らせて討死さすな』

とあつたので、味方の兵士馳せ塞がりて、强ゐて其の妄進を制したれば俊通も力なく、

『では……』

とて引き返へして思ひ留まつたが、其の時は俊通の双眼には充分涕涙の溢れつゝあるのを見た。

（三二）兵庫頭頼政官軍に降る＝官軍遂に大内に入る＝賊據所を失して亦六波羅を衝く＝清盛自から出でゝ賊を防ぐ＝賊軍遂に大に敗れて義朝遁る

兵庫頭頼政の心は無論貳心を萠しては居たけれども、未だ必ずしも直に義朝の配下を離れ去つて、六波羅に入り、官軍に屬しやうとまでの決心はなかつたのであつた。然るに義平が妄りに鋭氣に任かせて攻めて、同志擊をなし、益々感情を損じ、遂に官軍に歸せしむるに至つた。

左馬頭義朝は官軍の弱を示して逃ぐるのを、よい氣になつて輕々しく

進みて追ひ討をなしたが、官軍は進路に當る橋を撤したので容易に進むことも難く、其の上對岸には防禦の施備を全うし、固く守つて居るので、終に一旦我が陣に引き退く事にした。すると豈圖らんやである、自己の陣であつた大内には赤旗數十旒を押し立て、初め重盛、頼盛等と共に遁れ逃げたと思つて居たところの淡路守敎盛公が歩騎兵一千餘人を率ゐて入り、之を占領し東西南北の諸門を鎖ざし、堅く守つて居つた。義朝も茲に至つては進んでは斯くの如く追ひ詰めて見たのみで何の得る所もなく、引き揚げて我が陣に還つて見れば、敵に占領せられて官軍の旗が凛然たる寒風に吹き飜されて、何となく物凄く觀ゆるのみであつた流石の義朝も爰に至つては進退に究して居つたが、かくては到底我が陣に入る

ことも出來ねば、窮鼠猫を噛むの諺に漏れず、寧ろ破るゝまで六波羅を衝いて快く討死しやうとの覺悟をなした。かうなつて來ると強いものである。人間も命を捨てかゝれば何の怖い所もない、勿論義朝は英雄である、豪將である、命を惜みて敵を懼るゝものではない。怯懦輕躁の信賴の如きものと謀つて事を擧げたのが義朝の爲めに大失策であつたと共に、自から其の身を亡ぼし、愈々其の一族を覆へすことになつたのである。

義朝は遂に又引返へして軍を六波羅へ向けて進めた。惡源太義平は無論この軍に加はつたが、まづ第一に先鋒として進んだ。

六波羅なる官軍は義朝が死者狂ひに大内を攻擊する事をなさずば、必

ず六波羅へ來つて吾が軍の大内を占領した復讐をなすに相違ない、彼れは一旦の挫折に依つて戰鬪力を失ふてひるむ所のものではないと思つたので、軍備は恒に怠りなくやつて居た。果せるかな義朝等は雲霞の如くに攻め寄せたが、惡源太義平が最も先きになつて攻め寄せ來つて居る。官軍は之を見て清盛公に告げたが、清盛公は左右を顧み、

『誰れか豪士は居らぬか、彼れ惡源太が眞先に進み來たり居るぞ、彼れを支へ擊て』

と仰せられたる處、金子十郎家忠其の聲に應じて之に馳せ向つた。それより官軍の步騎先きを爭ふて出でゝ防戰に努めたが、賊軍は最早や最後の戰ひと思へば、殺傷多くを出せども敢へて驚かず、益々進んで官軍の

陣近く寄せて、惡源太義平は配下へ、

『先刻の戰ひにこの六波羅まで寄せ來たは寄せ來たが、門の中へ入らずして引揚げたるのは、如何にも口惜しかつた、今度は入つて內庭を蹂躙らん、進めや者ども』

とぞ下知せられたが、其の時義平に屬し居つた兵士五十餘名は

『委細承知』

と一齊に鯢波を作つて、冑の鍬を傾け敵の矢を防ぎつゝ突貫して其の門に入つた。官軍の門衞防戰すること能はずして引いたので、義平はまづその本意を遂げ、喜び勇んで我軍萬歲を唱へ、喚き叫んで駈け入つた。

偶其時官軍の總大將太宰大貳平清盛公は北の臺の西の妻戸にて、

味方軍勢に向つて防備上の指揮をなして居られたが、賊軍義平等の射る矢が雨の降る如くに妻戸の扉に中る。そこで清盛は怒つて、

『我が防禦をなす味方のものに耻を知りてよく防ぎ戰ふ義勇の侍士がないから、敵は勝ちに乘じて此處までに近き寄せたるのであらう。やをら自分が駈け出でゝ敵を追ひ退ける』

とて、起つて太き逞ましき黑き駿馬に黑鞍を置かせて乘つて徐ろに出で敵に向ひ、

『寄せ手の大將は誰人なるか、太宰大貳清盛見參に及ばん』

と馬の足を早め邀へて戰を挑まれた。そのときの清盛の扮裝は紺の直垂に、黑絲縅の鎧を着、黑塗りの太刀を佩ぎ、黑母衣に矢を負ひ、塗籠

籐の弓を持ちて居られた。義平之を見て、

『惡源太爰に在り。心得たり』

と應答に及んで駈け出られた、すると官軍の勇士筑後守家貞及び其の子左衛門尉並に主馬判官、難波經房、妹尾太郎兼康等を始めとなし。精鋭の將士兵卒數百名清盛の前面に馳せ進み遮ぎり塞がつて。官賊兩軍入り亂れ劇戰したが、遂に義平の率ゐたる部隊は敗れて五條の河を渡つて西へ退いた、義朝是を見て。

『義平は河を渡つて退き居れるぞ。彼れの退けるは我が家の疵と覺ゆる今は最早や何を期待すべきや。生て生甲斐なきことなれば討死せん』

とて鞭を擧げて陣頭へ駈け出でられた、鎌田正家馬より飛び下り。義朝

の馬前に立ち塞がり諫めて

『昔から源氏平家の兩家が弓矢を執つて武臣として王朝に仕へ、孰れを上。孰れを下と云ふの優り劣りもなしとは雖も、殊に源家をば世の人皆猛きものに申し侍る。譬へば栴檀の林には惡雜の木なく、崑崙の山には土石悉く美玉なりと云へるが如く强將の下に弱卒なしで、源氏に屬するものは從卒までが豪勇の名を得て居る。それに今朝よりの合戰に味方は兎角に不利の地に陷り多く殺傷者を出したるのみならず殘る士卒も馬憊れ、人疲れて、今敵に駈け合ふとも捗々しき戰ひはなし難きのみか、却つて御大將下賤の者の手に懸り。或は敵の遠矢に射られて擊れ給ふことになるやも計り難し。若し左樣のことにもならば

家の疵の上塗にして、且つは歎きの上の悲しみとなるは勿論。ましてい今は大將の御討死は覺悟とは見ゆれども、其の御死骸とならせ給ふたるときに敵に蹂躙せらるゝも口惜しく。素より是は我れ等臣下たる者のいかにもなをざりにすべき事にあらず。强ゐての其の御戰ひは無用ぢや。暫らく何處なりとも落ちさせ給へ。……山林に身を隱しても御名計りは大將尙ほおはしますがの如くに殘し置き、亦何時か再擧を圖り。討ち出づるやをも知れずと敵をして常に心配させ遣はすも亦謀略の一つではなからうか。其の上に只今茲にて大將擊たれさせ陣頭に討死されるやうのこともあらば、官軍は愈々利を得、諸國の源氏皆力を落し、果ては悉く敵に屬することゝなる。大將には此等のことも御

思慮はなきや、萬一に已むを得ずと云ふときが來つても、陣頭に尸を晒す覺悟は思ひ留まり給へ。其の時萬已むを得なければ御自害に及ばるべし。さするときは縱令御自害あつたにしても深く隱し參らせて關東に散在せる味方のものゝ憑みあるやうに取計ひ申す。今闇々と敵に駈け入つて打ち取られに行かれるのは、御迷ひで御座らふ』

と申し上げたが、正家は更に言葉を續けて

『されば早く落ちさせ給へ。御曹司義平殿にも定めて御所存があらうから、御會見になつて御相談をなし見らるゝこそよからんか』

と云へば。義朝朝臣

『卿の諫言肝に徹して有難く思ふ。されども東へ行かば逢阪山、不破の

關、又西國に赴かば須磨、赤石をも過ぎ得られまい。弓矢執るものゝ身は死ぬべき處にて死なずして遁がるれば、中々の恥辱ぢや、只爰こそは死ぬべき處と思へば寧ろ討死することにしやう。陣頭に骨を曝らすのは武臣の習ひぢや』

とて、はや手綱を繰り上げ、馬を勇まし出でやうとせられる、正家

『大將暫らく暫らく……』

とて重ねて

『こは大將の御仰せとも覺えぬものかな。如何にも短慮なる思し召し、大將の身は他の士卒の分際とは違ふ、大將の身には一人死なれるも一人の死に非ず。況んや死を一途に定むるは近くして易く。謀をなして

て萬代の計策を立てるのは難しと申せど、其の難きをなすは大將たるものゝこのときに行はるべきものなるをや。されば越王は會稽に降り漢の高祖は滎陽を逃げのび給ひた、皆謀を成して本意を遂げしには非ずや。堪えられぬ時に身を全うして敵を滅すをなすこそ良將たるものゝなす所と存ずる。それを尙ほも討死々々と仰せらるるは氣狂ひにはなきや、とく〳〵延びさせ給へ』

と云ひつゝ、義朝の馬の口を北の方へ押し向けたが、義朝は

『人の上に立てば、我が身命が我れと我れの自由にはされぬもの？』

と云ひ、打ち萎れて居られたが。終に悄然として五條河原を上へ向つて落ち行かれた。

（卅三）義朝逃亡の途上叡山の僧徒要す＝實盛の謀を以て僧徒の難を免る＝信頼義朝に追跡して醜辱せらる＝山僧龍華越にて又要して途を遮ざる

左馬頭義朝が逃ぐるを見たる官軍は、一齊に鬨を作つて。

『賊の大將義朝は逃げ居るぞ、遁がすな討ち取れ』

と口々に喚き叫んで追懸け攻め寄すれば、鎌田正家配下に下知して。

『左馬頭殿は思し召す旨あつて落ちさせ給ふことなるぞ。官軍を近づけさすな防ぎ矢仕れ』

と云つた。平賀四郎義信其の聲に應じて顧み。追兵を防ぎ戰ふた、義朝之を見て。

『あたら平賀を援けてやれ、敵に討たすな』

と仰せらる、依つて佐々木秀義、須藤俊通、井澤信景を始めとして、我れ先きにと競ふて引き返して、防戰したが、佐々木秀義は敵の騎兵二人を斬り、我が身も負傷して近江路を指して逃げ。須藤俊通は官兵三人を斬りて自分も斬られ、井澤信景は官兵四人を射殺して負傷したが是も亦近江に逃れた、後ち井澤信景は創を療治して自國なる甲斐の井澤に歸隱したと云ふことである。

斯の如く勇士等の防戰中に義朝は辛うじて正家等と共に追兵の手にも落ちずして、遂に遁れ東國に行かれる事になつた。

官軍は終に義朝を失ふたので。又孰れの敵を目的として戰ふことも出來ないことになつたが、其の兵士等は散伍になつて、信頼、義朝等賊魁

の住んで居つた邸宅を始め、其の賊徒に黨與となつた輩の家々に押寄せ、押し寄せして火を懸けて燒き拂ふた。

火を懸けられて此れ等に住んで居つた其のものゝ妻子眷屬は東西に逃げ惑ひ、山林原野人なき所に避けて身を隱した。其の方々へ遁がれ住ける人々は、我が行く先きはどこと定めなく、何處まで往いて宜しいかは知らざるも、跡の方を顧てはあの煙こそは我が家の煙であらうか、官兵は今にも追ひかけ來ることはなからうかとて、急げ急げと押し合ひ押し合ひして壯者は老者を扶け、長者は幼者をいたはりつゝ逃げ往けるさまは實に無慘の極であつた。されど天の赦さぬ謀叛者の妻子眷屬自業自得と評するの外はなからう。

比叡山には西塔の僧徒等賊軍敗れて、信頼義朝等が大原口を經て東國へ遁れ行くとの噂を聞き、此の逃亡者を打ち留めて官軍に引渡し、其の賞に預らうとの心組にて、約三百人八瀬と高野との間なる川のほとりの坂道の傍なる千束が崖と云ふ所に出で、待ちかけて居つた。往還の人の話に依つて義朝は之を聞かれ、

『都にて兎もかくなるべきこの身の鎌田が諫言に任かせたるに依つて是れまで逃げ落ち、山徒の手に羅りて武士に甲斐なき死を遂げるは誠に口惜しい』

と切齒して嘆息せられたが、齋藤實盛傍より

『御心配には及ばぬ、實盛謀を以て御通し參らせんいざ實盛の手際を

御覽下さるべし』

とて、其の崖の手前まで進み行きたるが、實盛馬より下りて、兜を脱ぎ手に提げ、其の僧徒等の中には自分が顔を見知れる者もあらうかを慮かり、頭の髪をふり亂し、其の髪にて顔面を掩ひ隱くし、近づきて

『右衛門督、左馬頭殿以下おもなるの人々は皆大内又は六波羅にて殘らず討死を遂げられたれば、諸國から呼び出されたる武士どもが、恥をも知らず妻子に遇ひたさに本國へ落ち下る所である、こんなつまらぬものを討ち留められても何の詮があるべきや、具足を召されやうとの爲めなるべきか、さらば物の具をば引渡し參らすべければ、命だけは助けて通らせ給はりたし』

と述べた。僧徒等は

『さては大將だちにてはなかつたよな、汝等如き木の葉武者には用はない、其の甲冑さへ脱ぎ棄てゝ引渡さば命だけは助けて遣はす』

と云つたので、實盛重ねて

『見た處山徒の御方々は大勢おはしますに、我等は小勢なれば草摺を切りても猶及び難きに恐る、いつそのことに脱いで投げ申すによつて各々方勝手に取り給へ』

と云へば、先きに進みたる若山僧

『實にも』

とて、待ち搆えて集る。後の方に居つた老僧も我れ劣らじと一所に寄り

蒐つた所へ投げた。群僧等互に取らうとして競ひ爭ふ所を義朝は隨屬し居つたる三十二人の騎兵と共に時機を見計らうて拔刀し兜の鎧を傾け其の衆僧の中に駈け入り、斬り卷くつて通られた。實盛も其後に隨ひ行く山僧等は俄に長刀を取り直して

『今のは大將に相違なし、遁がすな、たばかつて通るものぞ』

と追ひ懸け迫つたが、實盛顧み

『敵も敵に依るぞ、我れは義朝の郎等にて武藏國の住人齋藤實盛なるぞ寄せ來よ手並の程を見せ遣さう』

とて取つて返せば、大衆の中に武藝の達人は一人も居なかつたので、避易して散じ去つた。

義朝朝臣等漸くにして山徒の難を免れて山城國の八瀨の松原に出で、其の原を過ぎ行かれて居つた處、後の方より

『おゝひ、おゝい』

と聲を掛けて喚ぶものがあつた。誰れにやと顧みたるに、右衛門督藤原信頼卿であつたが、義朝等は既に疾くに落ち延びられたのと思つて居つたのが、意外にも後から追ひ付かれたので喫驚したが、信頼卿は義朝に向ひて、

『もし軍にうち負けもして東國へ落ちるやうの事もある時は、信頼も連れて下るを約束したのであつたが心替りのせしにや、信頼へは何等の樣子も聞せないは……』

と宣はれた。義朝は信頼卿が今度のことを初めて置きながら、更に何等軍のことには知る所もなく、敵に遇へば恐れ隱れて、主として軍氣を沮めるやうのことのみしたので、餘り憎さに堪えかねて、

『日本一の臆病の馬鹿者、かゝる大事件を思ひ立て一軍だにもなし得ずして、我が身も滅び、人をも失ふた不束もの、面の皮厚くも克く我れに遇ふて物が言へる』

と云つて、哄笑し馬をうつ鞭を以てその左の頰先を強く打たれた。信頼には鞭うち辱かしめられ返答もなし得ずして、誠に臆したる體にて、敵かれたる所を押し撫で押し撫でして居られたが。信頼の乳母の子式部太輔助吉と云ふのが傍に居つたが、このありさまを見て、

『何うしたる者なれば右衞門督殿をかくは慘酷致すや、足下達が剛の者なれば何とて軍には勝たずして負けて東國へは下るや』

と云はたれば、義朝

『彼の助吉とやらん云ふ男失敬なことを言へるぞや斬つて捨てよ』

と仰せられた。正家義朝に向ひ

『頭殿には何を宣はする御怒りはさる事ながら、今そんなことをなし得られる時でない……それよりは疾く落ち延びさせ給へ、敵が續く』

とて、行く處に又もや比叡山僧徒中横川塔のもの約五百人が龍華越に逆茂木を置き、信頼義朝を討ち留めやうとして居るのに遇ふた。

義朝の一行は各馬より飛び下り、手々に逆茂木を引き伏せ、引き伏

せして通る處に差し詰め引き詰め僧徒の中よりさんざん矢を放つて射つたが、義朝配下の士陸奥六郎義隆は首筋を射貫かれ、中宮大夫進朝長は左の股を射られて負傷した。義朝是に於て隨伴の諸士に對して、

『弓矢取る武士の身の習はせとして軍に負けて落つるは常の事であるがそれに引き換へ、慈悲忍辱を口に云ふ僧徒の分際として助くることなきまではまだよいとしても、人を擊ち留め、剩さへ物の具を剝ぎ取らうとなどする段奇怪至極、こんな惡僧の奴等は後の代の戒めに、一人も殘さずに斬り捨て仕舞へ』

と下知せられた。鎌田正家を始め義朝に屬し居つたる三十餘騎は馬の轡を並べ、山僧が五百人の中に駈け入り、縱横に馳せ廻はり、手當り次第

に斫りつけたので、立どころに三十餘人の僧徒を斬つたが、殘る大衆も大略負傷して、方々の山林、或は山谷に逃げ隱れたのみならず遂に落武者の擊ち留めに附いて、山僧等は云ひ出したるものゝ元調べをして喧嘩を初め、同士斬りをなして殺傷者を出すことも少うなかつた。

（三四）義朝娘の鞠育を後藤實基に託す＝信頼遂に仁和寺に還りて哀を上皇に乞ふ＝上皇之を主上に哀訴す＝官兵仁和寺を圍み賊黨を縛す

義朝はこの龍華越の變も幸にして其の身を全うして免かれることを得たが、龍華の坂本に着きて馬の足を休めたるとき、義朝は後藤兵衛實基を喚び、傍近く召して

『汝に預け置いた娘は何うか』

と今更思ひ出したるやうに突然尋ねられた。

實基

『そは私にも娘ありて、姫君のことはよく申しふくめ置いてあれば別に仔細はないから、先づ以て御安心あるべくやう願ひ奉る』

義朝

『さては安心なれども汝は是れより都へ歸り、あの娘を育みあげて、尼にもなして義朝が亡き後の菩提をも弔はさせて呉れ』

實基

『否へ我は頭殿の御行き遊ばさるゝ所は何處までも御伴仕り、兎も角もならせ給ふた御有樣を見屆げ參らせた上にて歸り上り姫君の鞠育にかゝることに致しませう』

と云へば、義朝

『イヤ其の儀は叶はぬ、我れも考ゆる旨あるに依つて、只今別れて汝を歸し遣はすのぢや、是非歸れ』

と仰せらるゝので、後藤實基は已むなく都へ引き返した。其の後實基をわが娘の如くして其の姫君を隱くし鞠育て居つたが、右兵衞佐鎌倉に覇府を開いて、世は源氏の掌握に歸した頃に及んで、其の姫は從二位中納言一條能保卿の奥方となつた。

右衞門督藤原信頼卿は八瀨の松原にて義朝に捨てられ、又と義朝の跡を追ふて東國へ向ふこともなし得ず、遂に都へ引き返さるゝことにせら

れたが、八賴の松原へ來られたるときまでは侍士五十餘人も附き從ふて居つたが、

『此の殿は人に頰を打たれて返事をだにし給はねば、侍士の主には不適當ぢや、こんな人に附いて居つては行く末は見えたる上にも更に心細い』

などゝ罵りつゝ散り散りに逃げ去つて行き、信賴の許には只獨り式部大輔助吉が附き從へるのみとなつたが、餘りに疲れて居らるゝやう見えたれば、助吉馬より抱き下して、干飯を洗ひて差し上げたるに、更に一口喰ふことだもなし得られなかつたが、又漸くにして馬へ乘せ上げて、助吉は更に

『都へとのことであるが、都は最早や悉く官軍のものなれば、我が味方をなすものは一人もなからうと思ふが、何處へ行かるゝにや、何處に御伴仕るべきや？』

と尋ねたる處、多くも答えられず、

『仁和寺へ』

と仰せられたので、助吉は

『さらば其の仁和寺へ御伴仕るべし』

とて、信賴卿を慰藉つゝ蓮臺野まで歸り來たるに、叡山僧徒の葬儀を執行し濟まして歸途に就けるのに出逢ふたが、時は夜になつて居つたることであるが、山僧等是れを見て、

『此の夜中に忍びて通るものは、落人ぢや、撃ち留めて甲冑を剝げ』
と喚き叫びたれば、式部大輔助吉衆僧の前に進み出で
『是れは案外の難題を蒙るものなか、我れ等は決して左様のものにては
なし、我れ我れは六波羅の太宰大貳殿の配下に居れるものにて賊軍敗
れて逃げ延びたれば、それを退ふて長阪まで向ひたるに、賊は最早や
遠く落ち延びたるより歸り參りたるものなるが、暗さは暗し、味方の
ものに追ひ後れたる所のもので御座る、何うして我れ我れは落人にて
御座らう……』
と答へたれば、眞に然りと思つたのであらう。正に難なく通らしむるや
うであつたが、忽ち一人の山僧愈々笠標を觀て其の云ふのが眞實か否か

を撿めやうと思つたのであらうか、松明をふり擧げて信賴卿の方へ近づ
き寄つたが、信賴卿はあはやと許りに驚いて馬から墜られたかの如くに
馬より飛び下られたが、甲冑を脱ぎ、大小刀、小具足及び馬鞍まで一切
を與へて
『命ばかりは助けて給へ』
と手を合せられたれば山僧は其の甲冑を撈え取り
『命はいらぬ、歸りうせう』
と怒鳴りつけたが、式部大輔助吉も亦終に剝がれた。
信賴は助吉と共に夫より仁和寺に赴かれた。それには後白河上皇が潛
幸されて居らるゝ所たる上に伏見中納言源師仲卿も行きて居られ、越

後中將藤原成親朝臣にも參つて居られたが、信頼卿は上皇へ竊かに人を以て

『元々の御惠みの餘波を以て參ゐつたれば、宜しく御取なし下され、御助けに預りたく偏へに希ひ上げ奉る』

と奏上に及ばれた。上皇には元來寵愛せさせ給ふて居つた信頼のことなれば、早速に

『信頼來たか呼び入れて置いてやれ』

とのことであつたので信頼主從も亦此の寺に居ることになつた。信頼は無論賊魁にして朝敵の大將であれば、公然住ましめられる譯には行かぬのであつたが、上皇の傍に隱し置かれて、上皇より主上に對し御

書を贈つて『信頼を助けさせ給へ』との旨を申し入れ給はられた。主上からは何等の宣旨の來らざるに上皇は更に重ねて使者を遣はし、主上へ

『朕を頼みて來たもの、枉げて助け置かせ給へ』

と哀願に及ばれた、其の使者の未だ皈り來たらざるに、三河守頼盛、淡路守敎盛の兩人を大將とし、官兵步騎合して三百餘人襲ひ來つて、信頼を始めとし、上皇を頼みて參ゐりし謀叛に與みしたる亂賊の殘黨五十餘名を逮捕した。其の中には無論越後中將藤原成親朝臣なども居られたのである。

（三五）越後中將成親朝臣の所刑決定と寄罪＝信頼誅せらる
＝戰功者行賞＝叛亂者の同族免官所刑＝義朝常盤に使者を以て別れを告ぐ

爰は六波羅なる平家の邸第の廐の前の廣庭であるが、越後中將藤原成親朝臣は山藍にて島の洲崎の形を摺りたる直垂の上に荒繩を掛けられ引き据えられて居られる。是れは謀叛をなしたる信賴に援助を加えられ味方をせられたと云ふのであるが、當時は法廷の慘刻時代殊に非常の場合であるから別に取調べて糺明することもなく、直に死罪に處することに定まつたが、重盛敎盛共に成親と姻戚の間柄であつたので、重盛より哀願して死罪を宥めた。

又右衛門督信賴は謀叛の主動者なれば最重の刑罰を以て處分せらるゝことは勿論で、死罪は決して赦さるべからざるのであつた。されど信賴卿は刑場に引き出さるゝ前に左衛門佐重盛からこたびの謀叛をなしたる

仔細を尋ねられたるに何一つの陳答にも及ばずして、

『只天魔の勸めであるのであらう、別に仔細はないのである、こんなことを企てたのは大に惡かつた今は心に後悔した！』

とて歎息し、更に我が重科は決して免かるべからざるものであることをも辨へず。

『このたび許りは如何にもして命を助けさせ給へ』

と絶え入るばかりに泣き悲しまれた。重盛は之を憫然に思はれ。

『こんな臆病なる不束者、縱令ひ生して置いたとて、何程の事か仕出かすべきや、減刑の處置を取計ふべきか』

と仰せられた。清盛は容相を正し

『左衛門佐は何を云ふ、このたびのことを起した主動者なるぞ、謙せねばならぬ！。其の上綸言の旨を何と心得る？』

重盛

『デハ是非に及ばぬことか』

と仰せられたが、信頼は愈々刑場に引かれて六條磧に行き、敷皮の上に引き据ゑられるに至つても、まだ諦めが付かなかつたものと見え、

『重盛殿には慈悲者である、仁者であると聞いて居るものに、何うしてマア信頼だけは申し助け給はぬのであらうか』

とて、轉げ廻はり、轉げ廻つて悶へ焦がれ悲ませられたれば、松浦太郎重俊が斬方であつたが、太刀の當て所も定まらず、遂に押へて漸くにして首を刎ねたが。誠に其の受刑見苦しき狀態であつた。

廳て朝廷にては戰功者に對して夫々行賞の沙汰があつて位階陞叙或は官等昇任の沙汰があつたが、太宰大貳清盛を正三位に叙し、清盛の嫡子左衛門佐重盛を伊豫守に任じ、次男太夫判官基盛を大和守に三男宗盛を遠江守に任じ、又清盛の舍弟三河守頼盛を尾張守に、伊藤武者景綱を伊勢守に任ぜられた。又叛亂に關係を有したる者の官位褫奪停免もあつて、信頼卿の兄兵部權太夫基家、民部權少輔基通、其の弟尾張少將信俊及び其の子新侍從信親、播磨守義朝、中宮太夫進朝長、右兵衛佐頼朝、佐渡式部大輔重成、但馬守有房、鎌田正家以下七十三人の官職を褫奪せられた。

其の後ち民部權少輔基通と尾張少將信俊とは尋ね出されて、基通は陸奥の國へ、又信俊は越後の國へ配流せられたが、其の外は漸次捕縛されて誅せられ、又は捕吏と戰ふて死した。

ア、昨日まで朝恩に誇りて餘黨一門に及びたるも、今日は誅戮の身となつて、愁嘆を九族に施す。朝に仕へて樂しみを春花の上に開き、夕に誠しめを蒙りては歎きを秋霜の下に顯す、朝の笑みは夕の悲み、誠に思へば人生の浮沈感慨に堪へぬものがある。

信賴は既に誅せられたが、義朝は京都を逃げ出で東國に源氏緣故のものが多きを恃みにして、東國に下らうとせらるれども、官軍の偵察嚴重にして容易に下り難きのみならず、都の方には自分の妻子なども住み居

れば、これ等の者の戀しくして、直ちに東路遠く落ち延びることもなし得ず、近江にも幸に源氏恩顧の武士の住居せるものがあつて、居民中にも親切を盡すものがあれば、身を寄せ隱れて京都及び東國の動靜を窺ふて居られたが、豫て義朝は九條女院の雜仕役をして居つた常盤と云ふ女に通じて、其の腹に三人の子を擧げられた。即ち其頃長が七歲にして今若と稱し、中が五歲で乙若、末が牛若と云ふので、一歲であつたが、此の母子等の事も無論心に掛つて心苦しき種の一つであつた。されば義朝は金王丸を道から還らして、妻の常盤に對し、

『今度合戰に打ち負けて何地をあてともなく、東國に指して落ち行く事にしたなれども、心は常に跡に殘りて居る、其方共の事のみ思はれて

行く先きの事は更に分らず、よしや行先何處に落ち着くとも、安心が出來る程にもならば吾が方へ迎ふべきにより、まづそれまでの間は深山にも……、身を隱くして我が方よりの便りを待て』

と云ひ遣らしめられた。是れ素より夫婦間に於ける情誼で、我が身の置き所なきときにでも心から妻の夫を忘れ、夫の妻を忘れると云ふが如きは稀れなることゝ思はれるであらう。

常盤は金王丸の通告の言葉の未だ終らぬのに、忽ち双眼に涕涙を泛べたが、愈々堪えかねたものと見えて、前に伏し泣き沈んだ。まだ牛若は何も知らず、母を見て呆れたやうにして居たものゝ、他の今若、乙若の兩人はをとなしやかに

『お父様は何處におはするの、お父様は……』

と頻に尋ねられたが常盤やゝあつて

『お父様は祖先以來代々我が家に仕へたる譜代の家來だちを憑まれて關東へ參られるとのことで、暫らく暇を申して云ひよこされた』

今若は、金王丸に向ひ、

『父の所を知るだらうから、我れを連れ行つては呉れぬか』

と云つて、涙を袖に受けられた。其の憫然には堪えなかつたのではあるが、それは出來ぬので、

『御父上から何れ近い内にお迎ひあれば、まづそれまで御待ちあれ』

と云ひ捨て、丈夫斷腸の熱涙一滴、手の甲へ受けて出た。

（三六）信西の刎頸と其子の流刑＝經宗惟方の左遷＝義朝義隆の首を湖底に水葬す＝義朝同行者を減ず＝頼朝同行者に後る

少納言入道信西は信頼の早晩叛賊となるべきものであることを後白河法皇に奏し、重く用ゆべからざることを諫言するに及んだが、信頼の怒りに觸れて自己が身の危きを知り信樂が峰に穴を堀り、自から其の身を埋められたが、遂に後ちに信頼の爲に堀り出されて首を刎ねられた。信頼は終に信西が見たるに違はずして叛賊となつたが、其の兵は官軍の征討を受して敗れ、其の身は縛に就いて重き刑に處せられたのである

こゝに一つの不思議なことが出來たのである。信頼の刑せられた頃に少納言入道信西の子供僧俗十二人が悉皆流刑に處せられたることである

これは別に顯はれたる罪があつたのではない、殊に信西は後白河天皇以前四朝に仕へて元老でもあるし・學識もあつて其の頃では比較的忠良の士であつたのである、而して又其の子息等も、學閥の家に生れたので何れも相當の學問も在り、心も亦奸曲と見るべきものはなかつたのであつた。

されば世人も信西の子息等の流刑は深く之を怪んだと云ふことであるが、これは其の理由が後から世に知られたとのことである。そは如何と云ふに藤原經宗と惟方とが自分等の信頼に與したることの次第を信西の子供等からして天聽に達し奉ることも在うかを慮つて、なき罪を拵へて上奏したのに依れるのであつた。

道のべの草の青葉に駒とめて。
　　なほ故郷をかへりみるかな

とは、信西の二男の播磨中將成憲朝臣が東國下野に配流せられたるより之に赴かるゝとて粟田口までうち出でられたるに京都の方の名殘惜しさに詠まれたるものであるが、中將は其の配所に到着の日にも、配所なる野州室の八島と云ふ所の少し手前にて、其のあたりの淋しきありさまを御覽せられて。ちらほらとある田舍の茅屋の棟より煙の心細さうに立ち上りて、我れは竄謫されて爰に來たと思ふて見れば如何にも感慨の涙止め難きことであつた、またそのときにも詠まれた歌がある。

我がためにありけるものを下野や。

むろの八島に絶えぬ思ひは

と云へるのである。成憲は學才の其の門に集まつたる信西の子息の中にても亦特に才德共に勝れたる人にて、配所に遷されたる日までも賢所に寄り合ひ、政治のいとまには寄り合ひして歌を詠み詩を作りなどして居られたと云ふことである。

邪は一旦正に勝ちて。正を陷れることが出來ても、遂には破滅の域に及び、落花狼藉。暴風暴雨の朝に於ける彌生の櫻園裡に足を踏みてオヤ〳〵と驚き忽ち蕭條慘愴の嘆を發するが如き時が來るのである、故に幾ばくもなくして、信西の子息等は召還されて復官の沙汰に遇ひ、之に引換へ一時黑を白うして居つた經宗、惟方等は賊に加擔して企みたる謀

計が顯はれ、終に左遷の憂ひに沈める身となつた。尤も一説には經宗惟方が流竄の身となつたのは、信頼等の賊に黨してなしたる謀計が露顯したる爲めには非ずして、後白河上皇の御旨に背き奉つたに據れるのぢやとも云つて居つて、愚管抄の如きはさう書いてある。

左馬頭兼播磨守義朝は金王丸を京都に遣はして、妻の常盤へ東國に遁がれ行くことを告げ知らせ置き、それより出發して近江の國の堅田の浦へ出られると、龍華越の變に僧徒の放つた矢に中つて仆れたれるを、味方に下知して其の首を打たせて持つて來たつて居られた陸奥六郎義隆が首を琵琶湖に沈めて、水葬にしやうとて取り出させられたが、之を見られて、

『八幡太郎殿の御子としては此の人許りであつたに。……實にたよりと思つて居つたものを、今後れ奉りては、いよ〳〵力なく覺ゆる』と、仰せられて、其の首を捧げ、南無阿彌陀佛と念佛を口に唱へつゝ、湖の中へ駒の足を早め、馬の太腹に水が浸漸る所まで進み行きてザンブと投げ入れて深く湖庭へ葬られた。

軈て義朝は湖中を舟に乘りて渡らうと思し召されたが、をりから陰雲微雨烈風吹きて湖上濤波起り居たれば、其の事叶はずして引き返し、遂に勢多の方に向つて進み行かれることに決せられたるが、今後は忍びの道なれば多人數の旅行は叶はぬからとの事にて、義朝は隱ふて來たつたものを集め

『諸君千辛厭はず。萬挫屈せず我れの爲に盡されたる志は深く心に銘して死すとも忘るゝことなし。我れも何處までも共に〳〵と思ふも忍ぶ旅路の已むを得ねば、此の處で諸君と別れて道を替へて落ち行くことにする、志あらば東國にて必ず面會の時があらう、まづそれまでは暇を取らする』

と仰せられたが。隨從し居つた武士共等は各々

『何處までも御供仕りたしと思へばこそ此の處までも來居るものに、今更に暇とは情けない……何卒御着の所まで隨はさせられたく、如何なる辛苦も嘗めて御身を守護し奉らんに』

と云へば、義朝

『其の儀は有難く思ふけれども、義朝には深く思ふ仔細あつて云ひ居ること故、それは如何にも叶ひ難ければ、諸君御苦勞であつたが、是れより愈々いざさらばであるぞ、もう强ゐて云ふな』

と宣はれるので、力及ばずして波多野次郎義通、三浦荒次郎義澄、齋藤別當實盛、岡部六彌太忠澄、猪俣小平六範綱、熊谷次郎直實、平山武者所季重、足立右馬允遠元、金子十郎家忠、上總介八郎弘常を始めとし、二十餘人は皆暇を賜はつて思ひ〳〵に各々自國へ歸り行きた、而して此の後も尙ほ連れられたるのは、嫡子惡源太義平、次男中宮太夫進朝長、三男右兵衞佐頼朝及び佐渡式部太輔重成、平賀四郎義信、鎌田次郎正家並に金王丸の八名であつたが、其のときは鎌田次郎は次郎とは云はずし

て兵衛と云つて居つた。

義朝の一行は僅かに八人とならせられて、東路を指すことにして篠原堤にかゝられたときは又夜になつて居つた。

素より逃げ行く路なれば、公然宿泊はならぬのみか、多く夜道にするになつて居つたのみならず、六波羅合戰以來一睡の夢だも結はれぬので一行の疲勞は誠に極の極に至つて居つたが、義朝ふと

『若い者は居るか。頼朝は來たり居るか』

と尋ねられたが、更に應答の聲がなかつた。義朝

『無慘や右兵衛佐は後れたのか、若し又敵に生け捕られたのであらうか。居ないやうぢや』

と宣へば、鎌田正家

『我れが尋ね參らせませう』

と云つて引き返した。

（三七）頼朝森山驛にて道を遮ぎらる＝其の中の二人を斬る＝正家頼朝を尋れて會し共に東下す＝大雪に會して頼朝又後る＝青墓驛の妾家にて義朝朝長を手及す

右兵衛佐頼朝は將種の明星、他日武將の一際目立て鎌倉山の空に皎々の光を放ち、五畿七道の草木まで其の威風に吹き靡かされたる程心は猛しとは雖も。今は年尚ほ僅かに十三歳にして成童にも達せねば、前日來の疲れに堪えかねて、馬上睡眠を催ふし、爲めに草津の邊より忽ち一行にかけ放れて後れられたのであるが。やゝありてふと睡りを覺まし驚き

て四邊を見られたるに、同行者は居ないのみか、人影とては更になかつた。時は無月の深夜にて咫尺も辨ぜぬ、暗黑なる道なれば、一寸先は見えねども、馬の行くに任かせて只一騎心細く落ち行きて、森山の驛に入られた。すると忽ち家の內に何やら人話の賑かやさうにするのが聞えるので。何事を云へることにやと聞ひて見らるれば。

『今夜は夜更けて馬の足音が繁く聞こゆるは落人の通るのであらう。擊ち留めて六波羅殿の恩賞に預からうではないか』

と云へるのが耳朶に徹したので、さては我れ等を捕へやうとして居れるのかと愕かれ茲でぐづ〳〵しては危險であるとて、馬の足を早めて通り過ぎやうとせらるれば、源內兵衛眞弘と云ふ者であると名のり、多くの

人と共に、長刀を持ちて馳せ寄り、右兵衛佐の馬の口に取り附き。

『落人を留め申せと六波羅より御觸れに依りて、我れ等出で向ひたり』

とて抱き下さうとして、手を賴朝の膝の所に當つると。賴朝

『何を小癪な』

と腰の刀を拔く手も見せず、眞弘の頭上から眞向二つに打ち割られた。眞弘は乍ち仰向きに仆れて死した。續いて出でたる男

『油斷のならぬやつかな』

とて、又馬の口に取り附いたが。是れ亦同じ樣に斬られたので、外のものは之に避易したのであらう。近より來るやうにもなく、漸次逃げ退いたので、驛を馳せ過ぎて。野洲の河原へ出でられた處、向ふの方より一

騎の來るのがありて。馬蹄の響きが耳に徹したので、官兵の巡察せるのでなからうかと思はれたが、それならば避ける方法もあらう、まづ聲を掛け見てからと思はれて

『今これへ來り居るのは誰れなるや』

と問ひ掛けられたるに、

『オヤ佐殿にておはしますか』

と問ひ返した。

『汝は正家か』

正家

『左樣……篠原堤の所まで參つて、佐殿のおはしまさぬことが知れ。

御父君左馬頭殿を始めとし。大に心配し居つた處で、正家が御連れ申しに參つたので御座る。まづ御無事で居られたので何より目出度いと實に迎ひに來た甲斐があつて嬉しく存じ侍る』

頼朝

『イヤ我れもつい疲れて居つた爲め。馬上睡眠したものと見え後れて以て、心配かけて相濟まなかつた。多少話もあれども、それは後にするとして……』

とて頼朝、正家の兩人打ち連れ急いたが、程なく義朝一行へ追ひ付いた。

義朝は頼朝に向つて

『何うしてそなたは今まで後れ放れたか？』

と尋ねられた。すると頼朝はその後れたる事由を概略話し、且つ森山驛で源内兵衛等驛のものが六波羅の旨を受けて道を遮ぎつたのを斬り拔けて通過したることをも談ぜられた。森山驛の働きに就いては殊の外義朝の心に叶ふたるものと見えて

『勇壯々々よくしてやつた』

と云つて、感賞せられたとのことである。

鏡の驛をも過ぎ行かれたが。忽ち不破の關は義朝等の逃亡せる者が東國に行くのを捕へやうとのことにて寢ず番をつけ。非常線を張つて居るとの噂が耳に入つたので。義朝の一行は之を避け、道を小關と云ふ所に取り。小野の驛に出で、それより東海道筋を北に折れ又右へ折れて海道

を右手にして、東下するするにせられた。然るにこの道筋は積雪深く。馬に乘りては到底困難であるので、甲冑を脫ぎ身輕にして步行することにせられたが、頼朝は幼年なれども馬上にては、誰れにも劣りを取られることはなけれども、徒步となつては他のものと共に行くことは叶はぬとて、遂に又後れられることになつた。

義朝は既にして美濃の國に赴き。青墓の驛に到着せられたが、此の驛に當時大炊と云ふ女戸主の豪家があつたが、この大炊は元來義朝の妾であつたのでそれに娘延壽と云ふのがあつたが義朝はまた之を愛して一女夜叉と云ふのを擧げられ居たるので。こんな緣故からしてこの家に寄寓せられた。乃ち惡源太義平を飛彈の國へ、中宮太夫朝長を信州へ遣はし

て募兵して時機を計り攻め上るべく命ぜられた。義平は飛彈へ赴いたが、朝長は伊吹の麓の積雪の道路を踏み通つた爲めに、龍華の難に受た創が痛劇しくなつて還て來た。義朝は

『賴朝は幼いが汝のやうに臆病者ではない、大方創の痛みに事寄せて還つて來たのであらう。果して痛めば汝は何處にも行くことは出來まいから暫らく此處に留つて居れ！』

と宣ふて、義朝ははや靑墓を出發しやうとせられた、朝長は恐縮して

『こゝに居れば、何れ遠からず官兵に見出されて捕へらるゝこととなるそれよりはいつそのことに、御手に懸けて死なして給はれ』

と申した、義朝

『臆病者じや。怯儒者……。不束ものと思つたが。是れではまだ義朝の子であるのう、能く云つた。念佛せよ』

とて、太刀を拔き其の首を斬らうとせられた。すると座に居合せた　延壽、大炊之を見て

『何うしてマア眼の前にて憂き目を見せ給はするぞ』

と其の太刀に取り付き泣き泣き口說たれば。

『非常に氣おくれがしたから、氣を引き立つる爲めに切る眞似をしたのぢや。なに斬りはせぬよ』

と云ふて、刀を鞘に納められたが、朝長は立つて寢室に行つた、延壽等も亦別室へ立ら去つた。

其の後ち義朝は朝長の所へ行きて

『何うぢや……愈々覺悟か』

と仰せられた。朝長

『今もお待ち申して居るので御座る』

と答え合掌して念佛を唱へたが、義朝の太刀は間もなく朝長の胸壁を三度貫いた。其の時から義朝の血族は正確に又亦一人減ずることになつたのである。

（三八）青墓驛の住民大炊の宅に押寄す重成遂に之に死す＝義朝野間に往く玄光之を送る＝義朝正家等と共に長田忠致に憑みて寓す＝忠致父子謀つて義朝正家を殺す

義朝が大炊の家に寄食のことを聞きつけたる青墓驛の住民三百餘人押し寄せた。佐渡式部大輔重成是れを見て、應に我れが生命を擲つべきは此の時であるとて、民家の馬を牽き出だし。之に乘りて

『無禮すな下賤のもの』

と喚き叫んで馳せ向ひ、馬の蹄に任せて散々に蹂躙つて子安の森に駈け入り。抵抗したるもの十餘人を射殺して、

『左馬頭義朝爰に自害する。首が入用なら勝手に持つて去れ、しかし我が手に懸けたりなどゝは決して言ふな！』

と云ひ置き、我れが義朝でないことが知られることもあらうかを慮かり、誰れ人であるかゝ知れざる程の創を面につけて。以て腹を十文字に掻き斫つて死んだ。時に年廿九であつた。衆は皆是れが果して義朝であ

ると思つたのであらうか歸りたれば、義朝の身には別條もなく。遂に夜になつて恙なく大炊の家から出發せられた。

出發するときに、義朝は大炊に向つて、

『朝長をば爰に置くから。永く目に掛けて大切にして吳れ！』

と云はれたが、素より義朝は大炊等母子に知らせぬ樣に手に懸られ。寢室に這入つて居るかの如くにして夜具衣類を其の上に蒙らせ置かれたのでそれが殺して空蟬の魂魄既に身を離れて死骸となつて居るのとは大炊母子は更に知らなかつた、されど夜は既に明けはなれても、朝長にはまだ出發せられる模樣もなければ。大炊等も少し訝かしく思ひたるので、その居室に往き見れば。無慘にも胸部を三刀貫きて、亡き人の數に入つ

て居られたので驚いたが。大炊は是に至つて始めて義朝が

『永く目に掛けて大切にせよと仰せられたのは。葬つて一遍の回向もしてやつて吳れとの謎であつたのか？』

と察し娘延壽と相談して、篠野原へ埋葬した。

義朝は大炊の家を出でゝから、平賀四郎義信にも亦暇を賜ひ。

『味方を催ほし機會を見、風雲に乘じて起れ！』

と諭された、義信

『さらば大將には是よりは何處を指し赴かせ給ふことなるか』

と尋ね參らせた處、義朝は

『まづ尾張の野間に往き、一應長田忠致と相談し。其れより東國に向ひ

關東武藏相摸地方に行く考えぢや」

と答えられた。義信

『私はそれは上策とも思はれぬ、何故なれば長田と云ふ男は身は富有に暮せども、義心に乏しく情け知らずで、勢ひある方に就く曲者なれば勢力なき落人を隱し奉らんとは思ひも寄らず、これへ行かるゝは御身を誤らるゝ基ひ餘りによき事には思ひ候はぬ』

と諫め半分に言つたが、義朝は

『そは所謂る取越し心配と云ふもの、長田は鎌田が舅のことなれば、何等の事のあるべきや』

と云はるゝので、義信も强ゐて留めもせず。茲に又義朝、義信の主從は

生別をなしたるが、義朝は正家を傍近く召し寄せ。

『是より東、海道筋を下らば驛々に六波羅より觸れを廻はして居れば、面倒を見ねばならぬから川路小舟で內海へ着かうと思ふが、如何に考えるか』

と問はれた。今この內海と野間と云へるは同じ所で二つの地名を唱へ居つた。其の實內海と云ふのは今の字の如き名稱で。野間が其村名の如きで在つたらしいのである。正家

『內海へ行くのならばこの驛はづれに鷲栖と云ふ所があつて、これに玄光と云ふ男が居るが、是れは大炊の弟で有名の强盜であるが、義俠心のある豪い奴ぢやから、工合よく賴んだら定めて內海に行くに充分な

る便宜を與へて呉れるであらうと思ふ。彼れは内海へは恒に往來して居るから、野間邊のことは能く知つて居るだらうから』

義朝

『デハそのものに賴んで見て呉れ』

との事であつたので、正家は玄光を喚び出して内海行につき便宜を與ふべく依賴に及んだ處、玄光忽ち快諾し。

『我れ等何事か左馬頭殿の御用をなすことのまたとあるべきや、委細呑込んだれば御心配には及ばぬ』

とて。直に高瀨舟を漕ぎ出だし來つて、義朝正家金王丸等のものを乘り込ましめたが、玄光は恒に船頭をして居つたものではないが、少し船にも乘つて艪をあやつり、舵を取ること抔も覺えて居つたので、自から水棹を執り、艪を押しながら其の川路を内海に向つて漕ぎ下つて居つた處其の川筋に府津と云ふ所があるが、此の所に關所を設けて、六波羅から吏員を置いて、其の川を上下する航客を檢べて居つた、此の舟を見て

『誰れぢや深夜に此の川筋を舟にて下るのは……待て』

と呼び止めた。玄光

『我れを呼ぶのか、我れは玄光ぢや』

と答えた。關の吏員

『何故夜行くや』

と問ふ。玄光

『今日は小晦日なれば、年内は今日明日許りぢやから、夜も得休まぬのぢや』

とて潜ぎ通つた。其の翌日を以て遂に尾張の國なる野間の内海に着した義朝は玄光に厚き禮辭あつて、上陸し玄光も共に長田莊司忠致の家に行きて。義朝

『急ぎ馬を借りたし』

との由を申し入れられたるに、忠致

『正月までは一日となつた今日。せめて我が家にて三ケ日位は御逗留あつて、御立ちになつては如何に』

と頻りに留めた、義朝も其の留めらるゝ儘に力なく逗留することにせら

れた。是れは眞誠なる深切には非ずして、胸に針ある待遇であるとは神ならぬ身の義朝の一行には知ること能はなかつたのである。遂に忠致は子の景致を膝元近く召し寄せ、

『左馬頭殿が我が家へ憑みて來られたのは勿怪の幸ひぢや、何うして此の殿を無難にお通し申すべきや。甘言以て宿泊らしめ參らせたれば、今宵にも是れを擊ち申すべきか』

と云へば、景致

『父上の御考えの如く誠に左馬頭殿を、御生かし申し置くべきものにあらず、縱令東國に下られた所が誰れか御助け申し上げるものゝあるべきや、人に功名させんよりは、我等の手にて擊ち奉り、平家の見參

に入れ、義朝の知行分をも下し賜はらば、子孫繁昌となることである』

と云へば、忠致

『よく云つた、左樣ぢや、汝も亦忠致の子であるぞ。名將のことなれば小勢たりとも擊ち奉ることは容易の事には非ず』

景致

『开は心配はなからう。御湯を勸め申し、湯室に居らるゝ所を橘七五郎は近國無雙の大力者なれば之を遣りて組まし、彌七兵衛。濱田三郎は共に劍道の達人なれば之を斬手に遣はし、刺し殺し參らす事にしやう、其の時鎌田は別室に呼び入れ頻に酒を强ゐかけ、軍の樣などを問ひ、他を顧みるの暇なからしめ、又金王丸と玄光とは遠待にして、

若者どもの中にて取り籠め引つ張りて刺し殺すに何等仔細あるべきやと云へば、忠致も

『其の謀計は神妙ぢや、我が子ながら見上げた』

と。夫に贊同した、平治の年號は一年のみで改元せらたので、明くれば永曆元年庚辰の歲であつたが、其の正月三日こそは實に左馬頭源義朝が非命に斃るゝの入浴をなしたのであつた。忠致は義朝の居室に行きて

『嘸御疲れなるべく、御湯を召されよ』

と申した。義朝

『さらば左樣しやう』

とあつて。廳て湯室に這入られた。

橘七五郎。彌七兵衛。濱田三郎の三名は忠致父子の依頼を受け、左馬頭殿を擊ち殺し參らせんとて、竊に浴室を伺ひしに、金王丸が劍を持ち て垢を流しに來たり居れば、擊つべき樣もなくして待つて居つた。義朝も全く運命の盡きたのであらう。程經て湯上りの衣物がないので、其の衣物をと需められたるも、人も居なかつた爲めに誰れも持つて參ねるものがなかつた。金王丸は怒つて衣物を取りに行くため走つて其の浴室から出た、爰に隙を得たので、橘七五郎等三人は駈け入り、橘七五郎進み寄つて。むづと義朝へ組み付きたれば、義朝も豪力であつたから

『心得たり』

と仰せられながら七五郎を捩ぢ伏せられた、其の時後の方左右から彌七兵衛濱田三郎との兩人が拔刀にて進み寄り兩脇へ二刀づゝ刺したれば名將の心は猛しと雖も、何とて耐えらるべき、

『鎌田はなきか。金王丸は居ないか……ア、無念やられた』

と云ひつゝ終に絕命に及ばれた。金王丸は浴室の方が何となく噪がしいやうに聞こへたので衣物を執るや遲しと走り歸つて見ればこの狀態なるより、手に持つたる衣物を投げ捨て、腰刀を拔き放して、

『惡い奴等一人も遁さぬ！、主君の仇思ひ知れ』

と一喝するや、橘七五郎。彌七兵衛。濱田三郎の首は中を飛んで墜ちた。

偶々鎌田正家は其の時忠致に向ひ合はせにて酒を飲み居たるが、主君

義朝の擊たれたることを聞き、立ち上るを酌取りの男忽ち刀を拔いて、正家に斬つて掛つた。正家は受けはづして其の刀をもぎ取り、却つて酌取りの男につき刺せば、景致正家の後の方より進んで正家の首を刎ねた正家も義朝と同齡で共に三十八歳を以て內海の土に化することになつたが。玄光は左馬頭の擊たれたのを聞いて是れは定めて鎌田がやつたのであらうと思つたので、まづ正家を殺さうと思つて、長刀を持ちて鎌田正家を尋ねたる處、鎌田も既に擊れたと聞いて。

『さらば長田めこそ惡いやつ斬り伏せてやらう』

とて、金王丸と共に多くの長田の家に居つた人々を斫つたが、遂に長田忠致父子は遁れて斫ることを得ず、廐に行き馬を盜み出し、之に乘り金王丸は京都へ、玄光は鷲栖を指して還つた。

（三九）賴朝鵜飼師に連られて青墓に行く＝關原にて宗清に遇ふて遂に京師に連れ行かる＝夜叉賴朝の捕はれて入京するを見て株瀨河に投身す賴朝遂に池禪尼の爲に死を救さる

積雲のために父の一行に後れ、小平山寺に迷ひ込み、遂に淺井の北郡に轉じ、尼寺を以て寓居と定め、約壹ケ月の日子を茲に費したる右兵衞佐賴朝は、漸く一陽來復の春となつて雪も消えかけたれば、足に任かせて出でたるが、父義朝の其の後の動靜果して如何にならせられたかは無論未だ知らせられず、諸兄の義平、朝長等のとも、また更に存ぜられなかつたが、父の一行が美濃に赴かれたることは素より承知であるので、青墓の驛には異腹の妹夜叉の前も居ることなれば、我が父が美濃に赴か

れたりとせば、定めて夜叉の家に訪づれ、夜叉母子には面會せられて居るに相違なかるべく、さすれば之に就て尋ねて見たらば、父の動靜は知られるであらうと思ひ、之に赴いて見やうと思つた、されども賴朝は一度も其の家に行きたることはなきのみならず、其の道路も何の方に行いてよいのやら頓と知り給はぬのであつた。故に名は何と云ふ川であるやは知られざれども兩山の間に一線の谷川に沿ふたる道があるに任かせ、其の道を辿りて居られたが、下り行くに隨ふて川も漸く大となり、道亦漸次に廣くなつた。其の川にて鵜を養ふて川獵を營業とせる所謂る鵜飼師なるものに出會せられた。

この鵜飼師は案外に情心の深い男であつたが、賴朝に向つて

『見受れたる所、道を迷ひになつたるものと察せられる、何方に行かれるのかは知らねども、御武家と見奉るは相違はなからうと思ふが、此の邊は山里なれば御武家がたの御出でになるのは稀れである、たとひ人目を忍び給ふ事にてもあれ、有の儘に仰せられよ、御志の所へ送り着け參らせんものを……』

と云ひたれば。賴朝にもそれが赤心を吐き居るものらしく、欺き騙すものとも見へなかつたので、有りの儘を語つて。

『青墓の驛に行かうと思へども、馴れぬ道筋にて何れへ行きて宜しいやら分らぬので、此邊を徘徊て居る』

と宣ひた。鵜飼師

『さては、さる事にて御はしましたるか、左樣なれば此の御姿にては、叶ひ難からうと思ふから姿を變へさせ給へ』

と云ふので、賴朝は其の言ふに任かせ、女の姿とならせられた。そして鵜飼師が伴のものゝ如くして持ち居られたる太刀は菅の葉にて包み、苞づゝみの送り者の荷物のやうになして、擔ひ行くことになし。

『これより青墓の驛へは餘り遠方と云ふ程でもないが、道筋隨分紛はしい且つ危險の所もあるから、我れが御供仕り男の女を具したる體にして送り參らせやう』

と云ひ呉れた。賴朝には大に喜びて、

『さらばさうして呉れ』

と賴まれた。

賴朝は青墓の驛に着して、大炊の家へ行きて、訪づれ

『我れは義朝の子賴朝である』

と名乘らるれば、延壽は悅ぶこと此の上なく、夜叉御前を召して、

『阿兄さんの御出でになつた』

と遇はさせ、樣々に待遇をしたが、其の內に父義賴の事を尋ねて、委細の樣子を聞かれ、賴朝

『デハ我れも爰に長居は無用である。急ぎ東國に行きて同志を募るに努めん』

と宣ひ。源家の傳家寶刀の鬚切の刀をば大炊が家に預け置き、東國へ向